シルクレポート

2008. 7 月号

No. 1

>>> Contents

赤の下線をクリックするとそのページに飛びます。

●発刊に当たって
・・・・・・・・・・・・・・・・・・ （財）大日本蚕糸会　会頭　髙木　賢 ―― ❶

●提携支援センターから
蚕糸・絹業提携支援緊急対策事業の概要について ・・・・・・・・・・・・ ―― ❷
活動状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ―― ❺

●今月の話題
純国産絹マークの制定について
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ （社）日本絹業協会 ―― ❻

●国内情報
国産生糸の生き残り戦略等を内容とする報告書から・・・・・・・・・・・・ ―― ❾

●トピックス
最近の海外生糸・絹糸の糸特性について・・・・・・・・・・・・・・・・・ ―― ❸❸
国内産地情報、海外情報（中国）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ―― ❸❻

●シルク豆辞典
シルクの豆辞典（16）　世界最古の絹織物
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 信州大学名誉教授　嶋崎昭典 ―― ❸❽

●イベント情報 ―― ❹❶

●登録コーディネーター一覧 ―― ❹❸

●蚕糸関係博物館一覧 ―― ❹❹

●統計資料 ―― ❹❺
（統計資料の詳細は統計資料目次をご覧下さい。）

※「シルクレポート」の主要記事と統計データは、インターネット（http://www.silk-teikei.jp/）でもご覧になれます。

発刊に当たって

財団法人　大日本蚕糸会
会　頭　　髙　木　　賢

新しい風が吹いてきています。

日本の社会の成熟が一層進んだということなのでしょうか、食品をはじめ本物であることによって得られる安心感を大切に思う人が着実に増えてきました。そして、本物であることを証明するものとして、材料、製造過程などについての生産履歴が求められるようになりました。

絹の世界においても、蚕糸絹業の提携によって材料まで国産にこだわった純国産の絹製品づくりを進めようということになり、これを政策的に進めるため、本年２月、大日本蚕糸会に蚕糸・絹業提携支援センターが設置されました。また、生産履歴を明らかにする純国産絹マークも制定されました。

一方で、国民の生活は厳しく、石油価格の高騰などがこれに追い打ちをかけています。一円でも安いものを、と経済合理性を追求する路線は依然として存在しています。しかし、一方にそういう世界があるからこそ、それに対置するものとして、安全・安心、希少性などの価値が一層重視されるようになったとも言えます。困難はいろいろあると存じますが、蚕糸絹業関係の皆様が、新しい価値の創造に取り組まれることを心から期待をしています。

そして、その支援の一環として、今般、その活動に関する情報の収集、提供、交換の場として、シルクレポートを発刊するに至りました。言い換えれば、このレポートは、純国産の絹製品づくりという新たな挑戦に取り組む蚕糸絹業関係者の情報の結び目の役割を果たそうとする意図のものです。したがって、このレポート自身、いかに旧来の惰性を排し、その殻から抜け出て創造的なものになることができるかが試されているといっていいでしょう。

それとともに、このレポートは、読者の皆さんのご協力によって魂が入るものです。暖かいご支援によって、大きく育っていくことを念願しています。

よろしくお願いいたします。

蚕糸・絹業提携支援緊急対策事業の概要について

蚕糸・絹業提携支援センター

1　事業実施までの経緯

財団法人大日本蚕糸会は、平成 20 年 2 月 29 日、新しい蚕糸対策の推進母体として「蚕糸･絹業提携支援センター」(以下､「支援センター」といいます｡）を設置いたしました。

新しい蚕糸対策は、農林水産省「今後の蚕糸業のあり方に関する検討会」（座長：林良博東京大学大学院教授）の最終報告書（平成 19 年 3 月）で示された方向性に基づき実施されるものです。

すなわち、同報告書では、蚕糸業の持続的発展を目指し、「国産原料を評価してくれる川下の事業者との蚕糸・絹業提携システムの形成促進」「輸入糸利用製品と差別化できる純国産絹製品の製造・販売の推進」「国産繭・生糸の希少性・特長の PR（純国産絹製品の表示)」という方向性が指摘されています。

これらに基づき、農林水産省は、平成 19 年度補正予算で、蚕糸・絹業提携支援緊急対策事業（予算額：約 35 億円）を計上し、事業実施主体を公募しました。財団法人大日本蚕糸会は、新たな蚕糸対策の事業推進に十分な知見と能力を有する民間団体として応募し､農林水産省は厳正な審査の上､2 月 19 日、財団法人大日本蚕糸会を選定し、2 月 28 日、補助金の交付決定をいたしました。

財団法人大日本蚕糸会は、これらの経緯を踏まえ、内部組織として支援センターを設け、事業実施母体としたのです（組織体制図参照)。

2　事業の目的

本事業の目的を一言でいえば、養蚕農家や製糸業が経営の安定を図れる水準の繭代や生糸加工費を得られるような、消費者に評価される純国産絹製品づくりの仕組みを作ろうとする事業ということになります。

このような純国産絹製品は、安価で量的も圧倒的に多い輸入の生糸・絹撚糸や絹織物を使った絹製品に比べて相当に高い価格になりますので、消費者の手をサイフに向かわせるようにするためには、国産の繭・生糸の希少性（国内総絹需要の 1％を切っています。）や特長を活かしたものづくりをしなければなりません。

そのような絹製品を作っていくためには、蚕種製造、養蚕、製糸、生糸流通等の蚕糸業関係者と、製織、染加工、織物流通、小売等の絹業関係者が密接に提携し、消費者に訴え

る絹製品のコンセプトを共有して生産・流通に当たらなければ、心が消費者に伝わりません。また、消費者にそのようにして作った製品であること、すなわち、繭生産から絹製品までの生産履歴（トレサビリティ）を知っていただくことが不可欠となります。

そこで、このような養蚕農家段階から参加して純国産絹製品づくりをしようとする生産・流通システム（提携システム）の構築を目指すグループを支援し、更には、このようなグループの活動が軌道に乗って、グループの販売利益の中から、繭代をはじめグループ関係者に再生産可能な対価が支払えるようなグループとなるよう支援していくことが、この事業の目的であり、また、支援センターの役割でもあります。

また、このようなグループの活動によりできた純国産絹製品であることを消費者に知っていただくことが極めて大事でありますので、支援センターでは、本号の記事で詳しく紹介しているように、（社）日本絹業協会に委託して、生産履歴を明らかにした「純国産絹マーク」を制定するとともに、その管理運営と普及を図ることにしています。このほか、このような純国産絹製品の展示会を有名百貨店で開催したり、各提携グループが行う展示会を支援したり、（社）日本絹業協会のシルクセンターに常設展示コーナーを設けるような事業も行っていくことにしています。

3　事業の内容

支援センターが行う具体的な事業内容は、以下の通りです。

⑴蚕糸・絹業提携システム形成支援事業

蚕糸業と絹業とが連携して、国産繭・生糸の希少性又は特徴を活かした純国産絹製品（非衣料を含む。以下同じ。）づくりを全国的に展開するための準備活動を推進することとし、以下の事業を自ら実施するとともに、蚕糸・絹業の関係者に対して、助成を行います。

ア　提携システム構築コーディネート事業

蚕糸・絹業提携システムの構築を図るため、蚕糸・絹業における情報の収集・提供等を行うほか、提携システムの構築に取り組む蚕糸業者及び絹業者に対する調整・相談等を行うコーディネーターを登録し、養蚕・絹織物主産地等必要な地域に派遣します。また、純国産絹製品の製造や販売を行うまでの準備期間における製品の試作や試験販売等の事業を実施します。

イ　提携システム構築バックアップ事業

蚕糸・絹業提携システムを構築する関係の取組が円滑に行われるよう、特殊繭の生産に関する研修会の開催、養蚕用資材の安定供給体制の整備、純国産絹マークの制定・管理・普及等の事業を実施します。

ウ　純国産絹製品づくり条件整備事業

（ア）稚蚕の安定供給

養蚕作業の省力化・効率化を図るため、稚蚕共同飼育所において１令から３令までの蚕を飼育するのに必要な経費を助成します。

（イ）機械・機材の整備

純国産絹製品づくりに必要な特殊生糸等

繰糸機、小ロット対応繰糸機、特殊乾繭用装置等の機械・施設の整備に要する経費を助成します。

（2）蚕糸・絹業提携システム確立対策事業

提携システムを確立するため、以下の助成を行います。

ア　提携システム確立のための支援

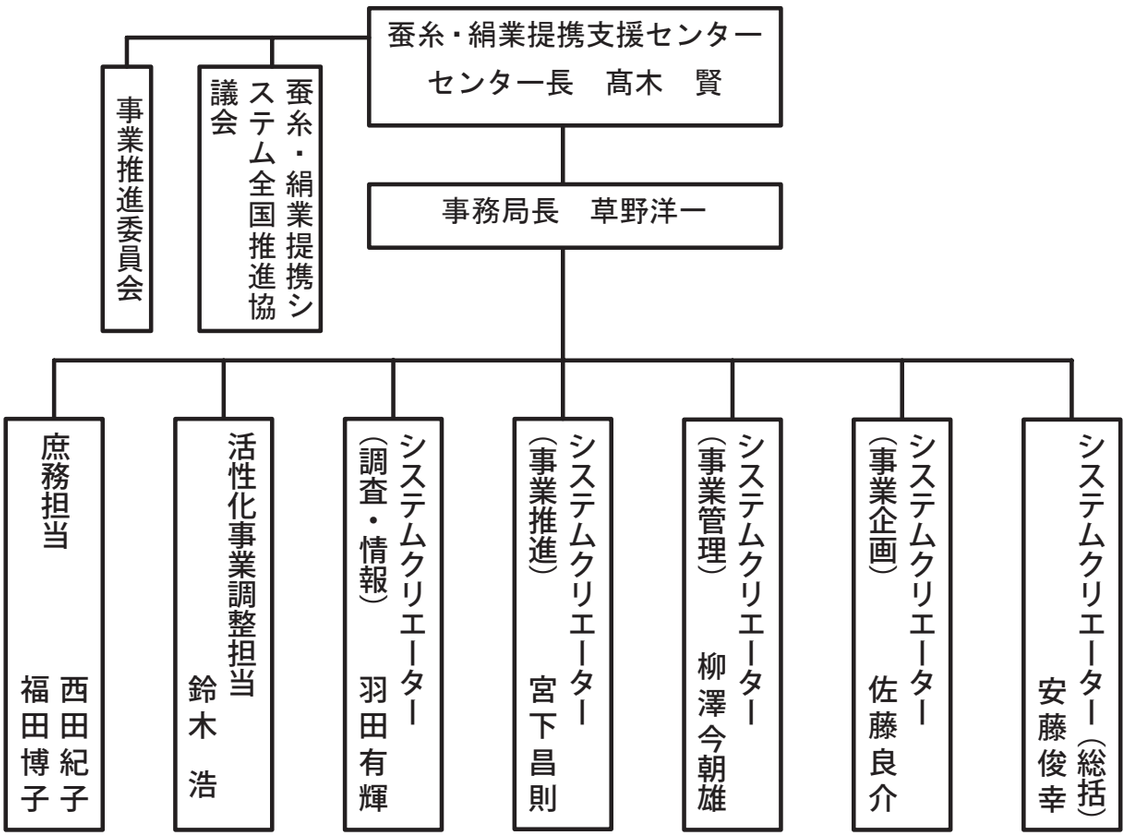
蚕糸業と絹業とが連携して、消費者に評価される純国産絹製品の製造・販売及び蚕や繭の新たな用途を開発した製品の製造・販売に取り組む場合の初度的経費に対する助成を行います。

イ　養蚕経営の支援

提携システムへの移行を志向する養蚕農家の移行準備期間中において、当該養蚕農家に対して、経営支援を行うための助成金を交付します。

以上が、具体的内容となります。　皆様方のご支援、ご協力を得ながら、支援センターの活動強化を図ってまいります。今後ともよろしくお願いいたします。

蚕糸・絹業提携支援センター組織体制図



蚕糸・絹業提携支援センター活動日誌№1（H20.2.6 ～ H20.6.15）

年月日	活　動　内　容　等
20.2.6	「蚕糸・絹業提携支援緊急対策事業実施要綱」等の制定（農林水産省）
20.2.8	蚕糸・絹業提携支援団体に応募
20.2.19	蚕糸・絹業提携支援団体として採択
20.2.29	蚕糸・絹業提携支援センター設置
20.3.3	第 1 回事業推進委員会
20.3.10	コーディネーターの活動等に関する検討会
20.3.10	平成 19 年度蚕糸・絹業提携支援緊急対策事業コーディネーターの登録（23 名）
20.3.17	蚕糸・絹業提携支援緊急対策事業基金造成
20.3.20	蚕糸・絹業提携支援緊急対策事業説明会（群馬県）
20.3.28	蚕糸・絹業提携支援緊急対策事業説明会（東京都）
20.3.28	純国産絹マークの制定
20.3.31	平成 19 年度 提携システム確立事業を承認（4 件）
20.4.15	蚕糸・絹業提携支援緊急対策事業説明会（群馬県）
20.4.17	蚕糸・絹業提携システム全国推進協議会
20.4.22	第 2 回事業推進委員会
20.5.19 ～ 20.5.21	蚕糸・絹業提携支援緊急対策事業説明会（京都府京都市・京丹後市、滋賀県長浜市）
20.5.20	平成 20 年度第 1 回蚕糸・絹業提携支援緊急対策事業コーディネーターの登録（42 名）
20.5.30	蚕糸・絹業提携支援緊急対策事業説明会 （福島県）
20.6.11 ～ 20.6.12	蚕糸・絹業提携支援緊急対策事業説明会 （山形県米沢市、福島県川俣町）

純国産絹マークの制定について

社団法人　日本絹業協会

１．純国産絹マークの制定に至る経過

農林水産省は、平成 18 年５月、今後の蚕糸対策の展開方向について検討を行うため、「今後の蚕糸業のあり方に関する検討会」を設置し、平成 19 年３月、養蚕業・製糸業（川上）と絹業、流通業者等（川下）が提携し、繭・生糸の生産から最終製品に至るまで一貫して国内で行われた純国産絹製品を「国産ブランド」として確立すること、一般の消費者が純国産絹製品を容易に識別できるような表示を行うこと（純国産絹マークの貼付）等を内容とする最終報告書を取りまとめました。

農林水産省は、この報告書を基本として、川上、川下が連携し消費者から適正に評価される、国産繭・生糸の特徴・希少性を活かした高品質な純国産絹製品づくりを推進するための蚕糸・絹業の提携グループの形成に向けた支援、純国産絹マークの普及推進等を内容とする蚕糸・絹業提携支援緊急対策事業を実施することとなりました。

また、農林水産省は、この事業の事業実施主体を公募により財団法人大日本蚕糸会に決定し、同会はこの事業を実施するため、平成 20 年２月 29 日、内部組織として、蚕糸・絹業提携支援センターを設置しました。

日本絹業協会では、このセンターの委託を受けて、消費者が純国産絹製品を容易に識別できる「純国産絹マーク」を、関係業界の意見を踏まえて、平成 20 年３月 28 日に制定しました。また、この純国産絹マークの普及推進を図るための管理規程等を制定したのでその概要を紹介します。

２．純国産絹マーク管理規程等の概要

（１）純国産絹マークの表示対象は、次の二つの要件をすべて満たす絹製品です。

国内繭から繰糸した生糸（紬糸等を含む。）を用いて、

①国内で製織された白生地及び国内で染織された和装品（きもの（反物及び仮絵羽））、帯のほか当協会が認めた和装小物又は国内で染織（製編）、染色・加工及び縫製された洋装品（アパレル製品及び服飾品）で絹業協会が認めたもの

②蚕糸業（養蚕農家・製糸業者、生糸流通業者等）と絹業（織物業者・流通業者等）の提携によって開発された生産履歴が明確な製品で国産の繭または生糸の特徴又は希少性が活かされているもの

（２）純国産絹マークの申請

１）純国産絹マークの使用を希望する者及び使用許諾申請資格者

純国産絹マークの使用を希望する者は純国産絹マーク商標使用許諾が必要になります。純国産絹マークの使用許諾者は、蚕糸業（養蚕農家・製糸業者）と織物業者・流通業者等が提携して統一的な企画の下に国産の繭又は生糸の特徴あるいは希少性を活かした製品の開発・生産に取り組むグループの代表者が使用許諾の申請資格者です。

２）純国産絹マーク使用許諾申請書の提出

純国産絹マークの使用許諾を受けようとする者は、次の事項等を記載した純国産絹マーク使用許諾申請書を当協会に提出することになります。

ア．製品の種類

製品の種類を、例えば、和装品の場合は、白生地、反物等、洋装品の場合は、スーツ、セーター等と明記します。

イ．製品の生産履歴

製品には生産履歴を表示し、履歴内容がわかるように次の記入例を参考に記入します。

（例）	蚕品種	○○○
	繭生産	○○県○○○
	製糸	○○○○
	製織	（株）○○○
	……	……
	染色・加工	（株）○○○

ウ．製品の特徴

製品に国産の繭又は生糸の特徴あるいは希少性をどのように活かしているか具体的に記入します。

３）添付資料

ア．純国産絹マーク使用許諾申請に係る提携グループの代表者の企業の定款、役員名簿、印鑑証明書及び会社の事業内容を記載した資料

イ．製品開発企画書

製品生産計画及び製品毎の生糸使用見込み数量と連携グループで開発した製品の特徴、セールスポイント等を記載した製品企画書（企画書の様式は当協会のホームページに掲載されています）

ウ．業務提携規約の写し

純国産絹マーク表示製品の生産に関して、生産工程の分担を定めた業務提携規約

の締結が必要になりますので、その業務提携規約の写し

（3）純国産絹マークの使用許諾

1）純国産絹マークの使用許諾契約書の締結の手順

ア．当協会は、申請書及び製品開発企画書等を基に審査委員会で審査を行い適当と認められる場合は、申請者に純国産絹マーク使用許諾契約書の案を２通送付します。

イ．申請者は、純国産絹マーク使用許諾申請書と純国産絹マーク運用基準の記載事項を確認の上、２通に署名捺印して、当協会に送付します。

ウ．当協会は、純国産絹マーク使用許諾契約書２通に押印し、１通を申請者に返送します。

2）純国産絹マークのポスター等への使用

純国産絹マークは、ポスター、チラシ等へのＰＲ資材に印刷して使用する場合には、そのデザイン見本を当協会に提出し、了解を得て下さい。

3．純国産絹マークの使用料

純国産絹マークの使用料は無料です。

4．純国産絹マークのシール、タッグの交付

純国産絹マークのシール、タッグの交付は、当分の間、無償で交付します。

社団法人 日本絹業協会
ジャパンシルクセンター

〒100-0006 東京都千代田区有楽町1-9-4 蚕糸会館　TEL：03-3214-1691　FAX：03-3214-1700
ジャパンシルクセンター直通　TEL&FAX：03-3215-1212
ホームページ：http://www.silk-center.or.jp/　E-mail：jsasilk@sepia.ocn.ne.jp

国産生糸の生き残り戦略等を内容とする報告書から

（平成 19 年度蚕糸業構造改革特別対策事業報告書)

社団法人　日本絹業協会

はじめに

日本絹業協会では、蚕糸業の構造改革にかかわる諸問題を明らかにし、具体的な推進方策を検討することを目的として、平成 17 年から３ヵ年にわたり、独立行政法人中小企業基盤整備機構の委託を受けて実施した国産生糸及び国産生糸による絹製品の生産、流通、販売に関する実態調査及び、その結果を踏まえて行った検討会等の結果をとりまとめている。最終年度の平成 19 年度には、国から示された「今後の蚕糸業のあり方」の方向付けを踏まえ、純国産絹製品のブランド化の条件及びその実現のための蚕糸絹業の連携推進にかかわる諸課題等を明らかにするため、関係企業、事業者の意向等の調査を行い、その結果からブランド化の推進方策、関係者の連携への取り組み意欲を喚起するための方策等について検討を行いとりまとめ行いました。以下にその内容を紹介します。

＜序 章＞
蚕糸業ときもの文化

わが国で作られる絹製品の太宗はきものを中心とする和装品である。洋装品分野にも多様な絹製品はあるが全体から見ればわずかである。和装品の生産は、養蚕、製糸、織物、染色、縫製のように分業化し、各段階の事業者は伝統に根ざした技術的蓄積の下で生産活動を営んでおり、単一企業により一貫生産されるものは極めて希なのが特色である。きものの流通は、生産地や消費地における織物問屋を経て小売業者から消費者に提供されるというルートにより行われている。生産者は、これらの流通業者や販売業者からの注文に従って生産する傾向が強く、価格設定の主導権もこれらの業種に握られている。

近年、きもの関係業界では、消費の減退に加え、安価な輸入品の増加や撚糸、織、縫製などの工程の一部海外移転が進むなど競争が激しい。各生産過程では、それぞれの販売先からの価格要求と生産コストとの乖離により、適正な収益の確保に困難を来たして、多くの関係事業者は縮小、撤退を余儀なくされてきた。最も川上に位置する蚕糸業者は、生糸流通市場におけるシェアを輸入生糸に奪われ、収益の圧迫には特に

厳しいものがあり、このままでは限りなく縮小の道を歩み続ける危険性をはらんでいる。現在、織物産地の全ての生糸、絹糸消費高４万5,468俵に対し、製糸工場の生糸の出荷数量は2,231俵（いずれも平成18暦年）で５％にも満たないなどの状況になっている。これを輸入絹製品を含めた絹の総国内需要量23万5,000俵と対比すると１％弱の割合である。

一方、きもの消費者は、きものをわが国固有の衣文化ととらえ、きものへの愛着は強いものがある。そして、商品としてのきものも、わが国の伝統技術に基づく国産品と認識している要素が濃いことも各種の調査から明らかである。このことは、仮に国内において、国産生糸によるきものづくりが消滅した場合、日本の絹文化のシンボルとしてのきものに対する消費者の愛着や信頼を傷つけ、きもの自体の衰退を招くことにならないかと危惧される。

一般に、文化とは、人々が生活に役立つように自然に対し働きかけを行った結果、それぞれの地域や民族においてかたち作られた技術、科学、芸術の総称であると理解されている。きもの文化も、日本人の衣生活、伝統的な社会行事、農家の生業としての養蚕、製糸などに深く根ざし、長い歴史の過程で醸成されたものである。

その素材（繭）づくりや加工（製糸、織、染め）などの「きものづくりの文化」と、出来上がった「きものの利用の文化」とは相互に影響し合い、支えながら発展してきたことも見逃せない事実である。一連の技術、産業の集積としての「きものづくりの文化」は、きもの文化の重要な側面であるといえよう。

国産生糸の生き残り戦略

以上のような厳しい事態の打開策を探るため、平成17年度から３年間にわたり、農林水産省と経済産業省の一体となった指導、支援のもとに実施してきた蚕糸業構造改革特別対策事業では蚕糸業という素材供給の立場を起点としつつ、上記のようなきもの産業の中における国産生糸の利用状況をトレースし、将来に向かってその存立の可能性の追求と、確立のための方策を検討してきた。その検討過程から意欲的なきものメーカー、織物問屋、デパートなどの業種が主導して構築したグループすなわち、生産から流通、販売までの関係業種が連携して統一した企画に基づいてものづくりを行い、合理的な流通販売を通して適正な収益配分を目指すいくつかの川上、川下連携グループの存在が明らかになった。

こうした動きの背景には、国産生糸は大幅な生産減により一種の希少価値が生まれたこと、平成10年になって、蚕糸業法の廃止による規制緩和があり、わが国の多様な蚕品種による特長ある生糸が活用できることになったこと、などをビジネスチャンスと捉え、本物優位とする消費者の心を掴みながら、販売力を強化しようとする機運が一部の絹業関係者の中に生まれてきたこと、更に、生糸生産を契約生産に導こうとする政府の方針が寄与していること等がある。

すなわち、川上、川下連携グループの多くのタイプは、輸入生糸にはない、特殊な蚕品種による特別な風合いを強調する生糸や、日本古来の蚕品種に由来したストーリーなどをテーマとする生糸を用いてブランド化を目指すものになっている。事実、各連携グループにおける原料生糸の価格は、最終商品の販売実績に応じてではあるが、一般の生糸の取引価格よりも高く設定されていて、製糸業者や養蚕農家の経営改善に寄与している。

以上のような連携グループにより生産される純国産絹製品の位置づけは、国産生糸全体に占める割合でみると３割にも達しないものであるが、今後の国産生糸の需要確保、ブランド化による高付加価値化が期待できる基本的な方向との理解が得られたところである。

このような連携によるものづくりの企画において、原料生糸のコストばかりでなく、あらゆる加工工程のコストが償われるような収益配分が得られることになれば、蚕糸業対策のみならず和装品のものづくり文化の存立、ひいては、きもの文化継承に貢献することにもなると思われる。

また、連携が成立するには製品開発から流通、販売までを企画し調整ができるリーダー事業者の存在とその役割が重要である。その役割を担う者はグループの作り出した商品の性格によって異なっており、どの業種の事業者が適しているというものではないが、現実には資金力と商品化の企画力、製品販売力をもった織物業者、織物問屋、販売業者のいずれかが中心になって進められている。

さらに出来上がった製品の販売促進の面では、消費者に商品特性を十分理解してもらい、純国産ブランドであることを認知してもらうことが肝要である。そのためには、高品質な商品を作り出すことが基本であるが、さらに純国産ブランドであることを認識、あるいは連想できるようなネーミングや製品の識別表示が効果的であり、また、販売店に対し純国産ブランドに関する情報や資料を提供し、販売に当るスタッフへの周知を図ることも重要なことである。

第１章　純国産絹製品の対象市場と関係する事業者

１－１　きもの市場における純国産絹製品の位置づけ

純国産絹製品として出来上がっているものは、ほとんどがきものを中心の和装製品である。また、和装の商品分野において純国産に特化しているような品目は見当たらない。アンケート調査によると、国産生糸で洋装品を生産している機業はわずかでほとんど和装品の生産である。

１－２　純国産絹製品に関係する業種別事業者数

純国産の絹製品の生産、流通、販売に関係している事業者は、原材料提供者である養蚕、製糸以外は、ほとんどが自社の生産及び営業品目の中で輸入生糸による製品も同時に扱っており、そのウエイトの方がはるかに大きいのである。純国産絹製品の専

門メーカーや専門の流通業者、販売業者は特殊な業態（個人や工房など）を除いては存在していない。また、特別に力を入れている川下業者の数はごく限られており、ほとんどは自社の取り扱い製品ラインナップの一部に純国産絹製品を位置づけしているに過ぎない。

純国産絹製品の生産、流通、販売に関係している事業者、すなわち市場参加者数をみたものが第 1 表である。原材料である生糸の生産者は 18 年現在、養蚕農家は 1,345 戸、製糸業者は 8 社で、うちアンケートに回答のあったものは 5 社、アンケート調査の結果から、18 年現在、国産生糸を取り扱っている生糸流通業者（糸商）は 11 社、国産生糸を使用して織物生産を行っている業者（機業）は 43 社、純国産の絹織物、絹製品を取り扱っていると答えた織物問屋は 33 社、同じく販売を行っている小売業者は 30 社あるとみられる。

（第 1 表）純国産絹製品に関係する事業者数（18 年）

事業者名	関係業者数（注 1）	全事業者数（注 2）
養蚕農家数	1,345	1,345
製糸業者等	8	8
生糸流通業者（糸商）	11	72
絹織物業者（機業）	43	2,890
絹織物流通業者（織物問屋）	33	682
絹織物販売業者（小売店）	30	970

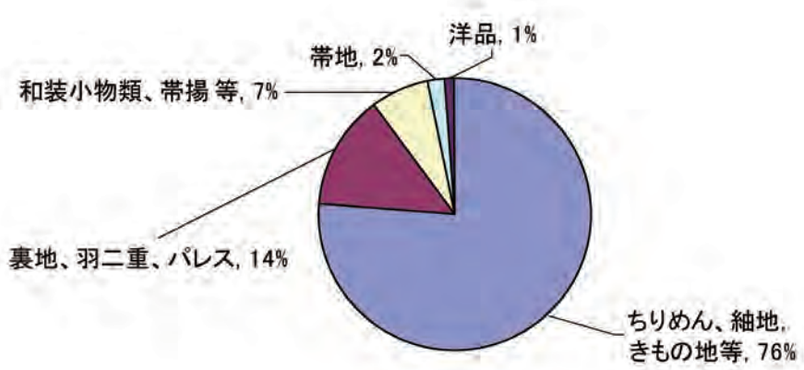
注 1：養蚕農家数、製糸業者数は農水省資料
　　糸商、機業、絹織物問屋、小売店はアンケート調査の回答数
注 2：絹織物業者は日絹工業組合連合会員数。生糸流通業者は日問協会員数。
　　絹織物流通業者は東京、京都、大阪、名古屋の各織物卸商業組合の組合員合計。　小売店は日本きもの連盟加盟店数

第 2 章　純国産絹製品の生産、開発

2－1　繭、生糸生産の現況

繭、生糸生産の最近 3 ヵ年の状況は、第 2 表の通り、減少傾向が続いている。19 年度の製糸工場の上位 3 社の生産数量は、1,290 俵で前年比は 91％、このうち約 3 割を占める特殊銘柄生糸は出荷が好調で品種によっては半年待ちとなっているものが

（第 1 図）国産生糸による絹織物生産品目（機業の 17 年度アンケート調査から推定）



ある。生糸加工費は最近、原油の高騰、小ロット繰糸の影響で増加傾向にある。製糸工場平均で 4,200 円～ 4,500 円程度になっている。普通生糸は高品質であることと繭産地の証明や生産関係のストーリーの説明を求められるが、生産が減少のため引き合いは好調である。ただし、製糸の販売価格は 3,500 円程度でコストの転嫁は容易ではない状況にある。

（第２表） 繭、生糸生産量の推移 (暦年)　　資料：蚕糸統計月報

年次	繭生産数量（トン）	生糸生産数量（俵）	生糸出荷数量（俵）
17 年	626	2,508	3,842
18 年	502	1,956	2,231
19 年	431	1,604（1～11 月）	1,680（1～11 月）
19/18%	85.8	—	—

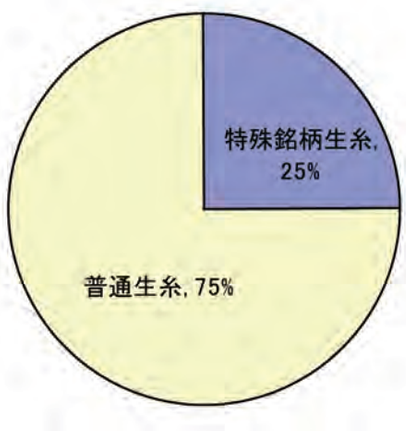
２－２　製品開発の現状

純国産絹製品生産への取り組み

一般に成熟化した市場においては、企業の競争優位にたつ製品基本戦略はブランド化であり、多くの企業が取り組んでいるものである。企業の経営にとって必要なものは、人，物、金、それにブランドと情報。ブランドは多くの企業にとって無形資産でもありその価値は高まっているといわれる。

国産生糸による製品のブランド化への取り組みの状況であるが、これを原材料の生糸の方から見ると、製糸業者の生糸出荷数量の約 25％のものが特別仕様の特殊銘柄生糸であった。これ以外にも製品のブランド化に寄与した国産生糸もあると思われるが、主として素材生糸の差異によったブランド製品づくりに係わる原料生糸であったと思われる。

（第２図）製糸業者の生糸出荷数量割合（18 年）



また、純国産の絹製品製造についての企画、提案をしている事業者は誰かを知るために、国産生糸を仕入れて織物を製造している機業者に聞いてみたものが第３図である。機業者の答をみると「自社独自の計画による」が回答の 44％と最も多く、次いで「問屋からの注文による」35％、「自社計画と問屋からの注文の両方」が７％ある。このような、純国産の織物生産を機業が自社企画で生産をしているというものは帯関係や先染め織物関係に多い。またその中には機業が独自で自社マークをつけブランド化を図っている業者、洋装品や試作品製作という業者もいる。また、後染め産地では純国産の織物生産を企画しているものには、あわせてメーカー機能を持つ織物問屋が多い。

（機業者の絹織物生産に関する事例調査特記事項）

①袋帯を自社企画で生産、自社マークを付け販売。前売問屋からの注文はあまり期待していない。
②男物着尺を自社オリジナル製品にして問屋に提案。
③赤城座繰り草木染を自社で計画し問屋に提案、販売。
④自社ブランドの帯を生産している。問屋からの８割の注文を見込む。
⑤織物になると純国産の品質の差は見分けられない。変わった糸でストーリー性のあるものが欲しい。
製糸はサンプルを提供してＰＲしてはどうか。国産生糸の情報が少ない。
⑥国産生糸は供給力がない。
⑦先染め関係では国産糸を評価する傾向がある。
⑧国産生糸とめぐり合わせがない。特長のある糸は何でも使ってみたい。

織物問屋の純国産絹製品の取り扱いの状況は、第３表の通り、現在、取り扱いを行っているという業者数は 33 社であるが、今は扱っていないものの「純国産絹製品には関心がある」及び「条件によっては扱ってみたい」と答えているものが合計 23 社ある。つまり、アンケートに答えてくれた業者に限ってみると、機業、問屋共に純国産絹製品に関心があるものが相当数いるようである。

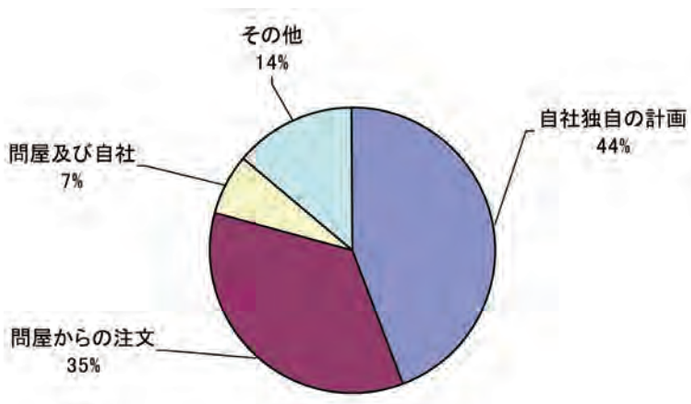
（第３表）　純国産絹製品の生産、取り扱い事業者数

（実数）

	糸商	機業	問屋
現在、生産、取り扱いを行っている	11	43	33
関心があるので今後行いたい	2	32	9
条件次第では扱ってみたい	―	―	14
関心はない	―	16	5
合　　計	13	91	61

また同じく織物問屋について純国産製品への関心の程度を探るため、国産生糸の新しい素材について例を挙げて関心の有無について聞いてみたところ、現在、純国産製品を取り扱っている業者では約半数が「関心はある」と言い、また現在取り扱っていない業者でも約２割が「関心がある」という答であった。ただ、関心はあるが「国産生糸の新素材のことは良く知らない。情報が得られない」という答えがかなり多いことに注目しておく必要がある。製糸業の状況や新しい国産の絹素材に関する情報を最もよく知っているのは糸商や機業者であるが、そのような情報は産地問屋、消費地問屋、小売業へと行くにしたがって薄れ、伝わってこないという。

（第３図）機業の純国産絹織物の製造（回答数構成比）



資料：アンケート調査結果

（第４表）新しい国産絹素材に対する関心の程度

（織物問屋の回答数割合%）

	純国産絹製品取り扱い業者	扱っていない業者
新しい絹素材に関心はある	49	18
関心はあるが情報がない	33	57
新しい絹素材に関心はない	18	25
合　　計	100	100

資料：織物問屋へのアンケート調査

（織物問屋の純国産絹素材に関する事例調査における特記事項）

①特徴のあるもの、ストーリーのあるものでなければ駄目。

②小売の企画力は弱い。

③重要無形文化財指定の製品は国産生糸であるべきだと思う。

④全て正絹 100％で取り扱っている。純国産の差別化商品の企画までは手が回らない。

⑤機屋から白生地を仕入れ自社で染め加工し直接小売へ渡す。７割は自社ブランド名。

⑥大量仕入れ業者として純国産物は区別していないし今後も特に扱おうとは思わない。

⑦自社ブランドで需要者に提供、希少性と文化性それに秀逸な加工技術で産み出された高品質がブランドの条件となって信頼と高い評価を得ている。

⑧新しい特殊生糸の情報を帰郷したとき偶然に地方新聞で見た。社の方針と合うので商品化に取り組んだ。これから増えるものと予想している。

２－２　きもののブランド化

純国産きもののブランド化の条件

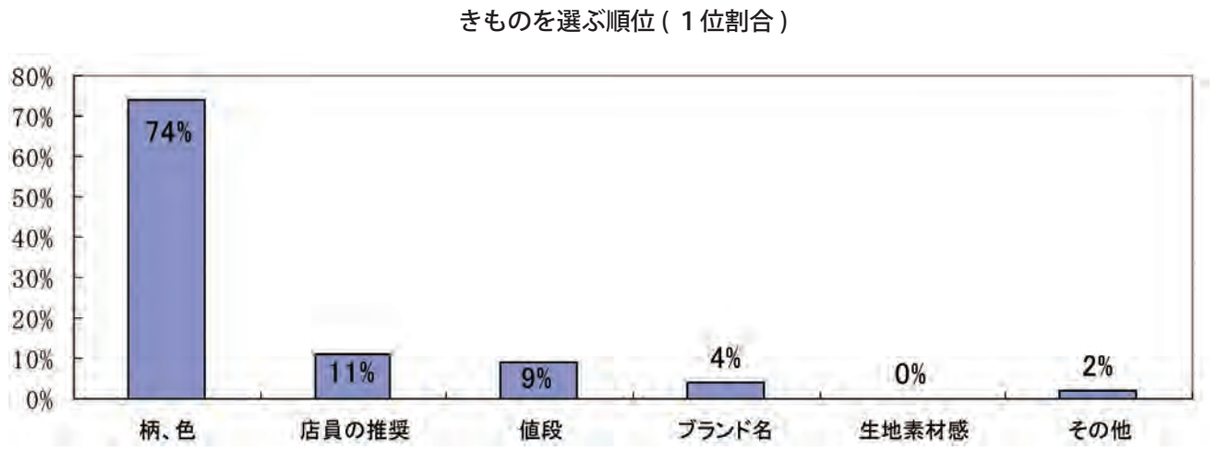
消費者のきものに持っているイメージは、伝統的なもの , 高価なもの、きれいなもの、フォーマルなものという順位。そして、きものを選ぶ時に重視するものとして、柄、色が１位、値段が２位、雰囲気、着まわしの良さが３位、素材を４位に挙げている。（(株）ＰＲ現代、和の生活マガジン６月号アンケート）

今回の小売店のアンケート調査結果でも同様な傾向で、消費者がきものを選ぶときの目安の順位は第１位が柄と色、第２位が店員の推奨、第３位が値段、の順である。ただし、これは全体的な答えであって、商品によっては例えば色無地、紬などでは生地素材感が選択の上位になっている。ちなみに、選択順位の第２位では値段、生地素材、店員の推奨の順番である。

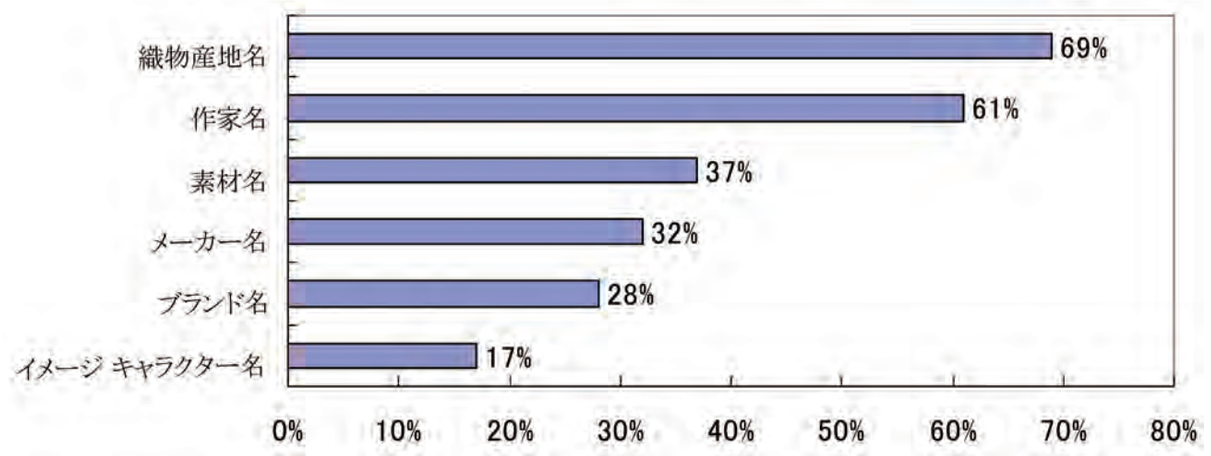
売り手の方では、商品をどのように扱っているか。ネットで検索するとネット販売のサイトが現れるが、そこには各社ともきものを特選品や企画品などに区分けして紹介している。そこでは、は品質の特長の説明に加えて、伝統、老舗、希少性、こだわり、信用などを特別な要素として掲げている。これらがきものの製品価値の説明であり、これに特別のネーミングやスローガンが結びつき消費者に支持され広く認められたものがブランドとなる。

第５図は小売店アンケートの答えから商品名のネーミングの特徴について分類したものである。具体的なネーミングで多いのが、産地名、きもの作家名、デザイン監修

（第４図）　消費者のきものを選ぶ目安の順位 (小売店の複数回答１位の割合)



（第５図）　きものブランド表示のネーミング (小売店の複数回答割合)



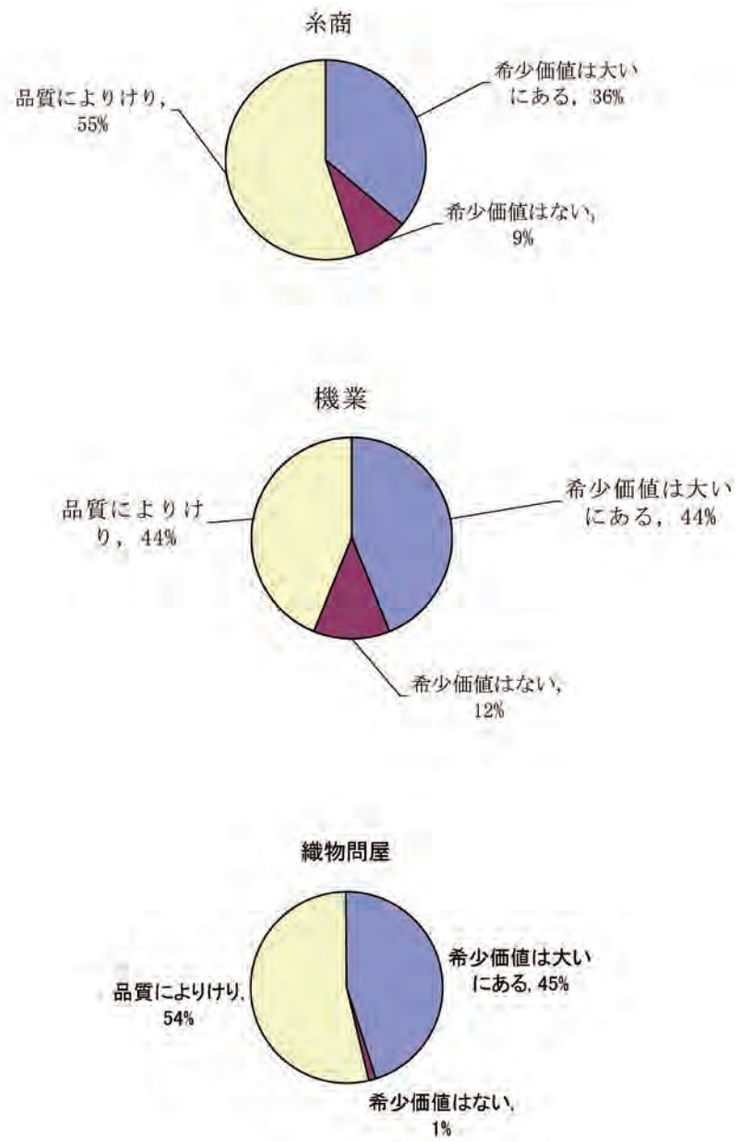
者名、生地素材名、きものメーカー名など。スローガンとしては、製品の出所、創業者の歴史、製品にまつわるストーリー等がある。また、きものの美しさの象徴に歌舞伎俳優や女優をイメージキャラクターとしているものが多い。

上述の商品のネーミングのそれぞれはブランド価値の表現と思われ、それぞれ産地ブランド、企業ブランド、作家デザイナーブランド、キャラクターブランドなどのようにいわれている。また、きものブランドの特徴として、洋装品ブランドのように、商品識別のためのロゴマーク，例えばナイキのスウォッシュやルイ・ヴィトンに見られるように、ロゴマークそのものをきものに付けるようなことはしていない。きものの場合、ブランド名などのロゴマークは着尺では反末の織り口、仮絵羽の場合は袖口

に折り込んで付け、完成商品では切り離されるのが普通のようである。また、デザイン、柄にしてもトレンディなものは少なく花鳥風月が多いように一般に保守的といわれる。

それでは、純国産の優位性を主張し、差別化をアピールしているものとして何があるか。ネット通販で見ると、数多いきもの商品の中で、いくつか純国産ブランドをアピールしているものがある。例えば「小石丸」、「松岡姫」、「世紀21」など繭から製品までを統一ブランド名としている商品、そこでは、ブランドの価値として特に高品質と希少性を掲げている。スローガンは、小石丸では「美智子皇后が皇居で飼育している日本古来の繭と同じもので織られたもの」、松岡姫では「月山山麓の蚕のみを使用した極細生糸による極上の絹織物」、世

（第６図）純国産絹製品の希少価値の認識（アンケート調査回答数割合）



紀 21 では「養蚕主産地の群馬オリジナル品種の繭による染め上がりの良い織物」の如くである。このように特別のネーミングやスローガンによって純国産という出所と、高品質、希少性、ロイヤルシルクなどをアピールしているところは純国産ブランド独特のものである。

第６図、第７図は関係業者の純国産絹製品の希少価値の認識の程度を見たものである。糸商，機業、問屋いずれも「希少価値は大いにある」、「 純国産のロゴは価値がある 」と認めている。しかし、一方でほぼ同数が「品質によりけりだ」と答えている。このことは，ブランドの基本価値は品質であり、希少性などの付加価値の要素と並んで品質を重視していることがうかがえる。ただ、この場合の高品質とは、素材生糸の品質のほか、風合い、着心地の良さ、などの感性に属するとも言える生地素材感や、優秀な染織技術により作り出された染めや柄、商品の出来栄えなども入れたトータルを指していることを理解する必要がある。

（きものブランドに関する織物問屋事例調査における特記事項）

①女性は一般に皇室に関心が強い。

②日本に桑、蚕が無くなれば純国産ブランドのドラマの筋書きが無くなる。

③ブランドは特長ある高額商品で限られた顧客に向けた限定商品のことである。

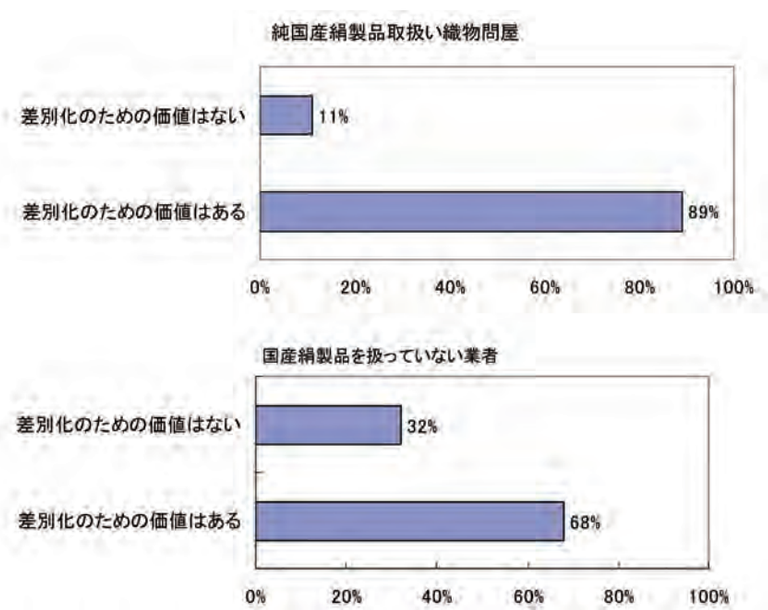
④品質が保証されないとブランドにはならない。セールストークだけでは信頼されない。

⑤５倍も高い生糸で製織したものとそれ以外のものとの明確な品質の違いを消費者がどこまで理解してくれるのかでブランドの評価が決まる。

⑥問屋のオリジナル商品にはデザイナー、キャラクターを商品名としたものが数多い。

⑦小売向けの説明には口頭では信頼は生ま

（第７図）純国産というロゴマークの価値



れない。商品にブランド名のほか、原料繭、生糸の名称、繊度、重量、メイドインジャパンなどの説明表示をつけている。

⑧きものブランドの定義をするのは難しく一概には言えない。

⑨本物志向の伝統品として小石丸を年間200反仕入れＮＣ店に販売。

純国産ブランドの識別表示の問題

ブランドには他社製品との識別という重要な機能があり、製品の作り手の主張などが多くの消費者に認められて始めて成り立つものである。このため、消費者に純国産ブランドをはっきりと認識させる有力な手段として商品に純国産の認証と表示が必要との考え方がある。

第８図は、織物問屋に識別表示のことについて聞いたものである。純国産絹製品を扱っている織物問屋の回答は、「商品を区分け表示する必要がある」というのが圧倒的に多い。これは自社の納入商品の小売段階での販売促進からの意見と思われる。一方、少数ではあるが、表示を行うのは困難という答えもあり、その中には、表示の正確さを危ぶむ声があることも事実である。また、商品に純国産の識別のためのマークを付ける場合、第三者による厳密な認証が必要という意見もある。

（表示に関する問屋事例調査での特記事項）

①純国産ものを見分ける人は業界のなかにもいない。不当表示の防止ができるか。

②明確な品質の違いが無ければ区分けする意味がない。

③日本の絹マークに製造履歴による純国産の表示と当該製品名（ブランド名）を添付すればよい。

④提携販売店にも純国産取扱店の表示が欲しい。

⑤客が国産に固執していない。問題は中身である。

普通生糸による製品のブランド化は可能か

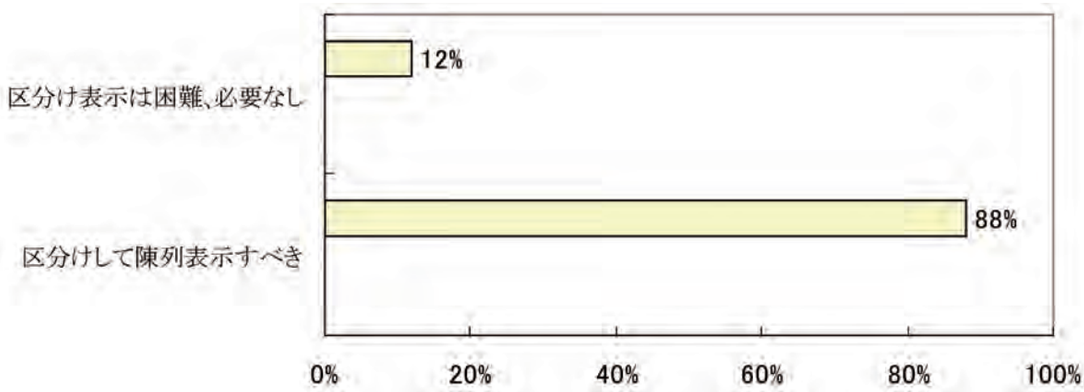
蚕糸業の全体の生産額の確保と、各経営の安定化のためには、国産生糸による製品の全てをブランド化することが重要である。問題は大勢を占めるコモディティ化した生糸すなわち定番化した国産普通生糸は一般に量産の規格品並みに扱われており、特殊銘柄生糸のようなネームバリュウに乏しいと思われている。したがって、その製品は特別のネーミングや純国産といった出所表示などの付加価値に属する要素をアピールできていない。実際の生糸取引価格を見ても国産の普通生糸は輸入生糸とほとんど差がないのが現状である。

普通生糸を使用する立場の機業者の見方は第９図のように、「普通生糸製品のブランド化は可能と思う」というようにブランド化の可能性を否定してはいないものの「ブランド化は困難」という回答もほぼ同数ある。このことは、普通生糸使用の製品には、特長の表現が難しく、ブランド化が容易でないことを物語っている。

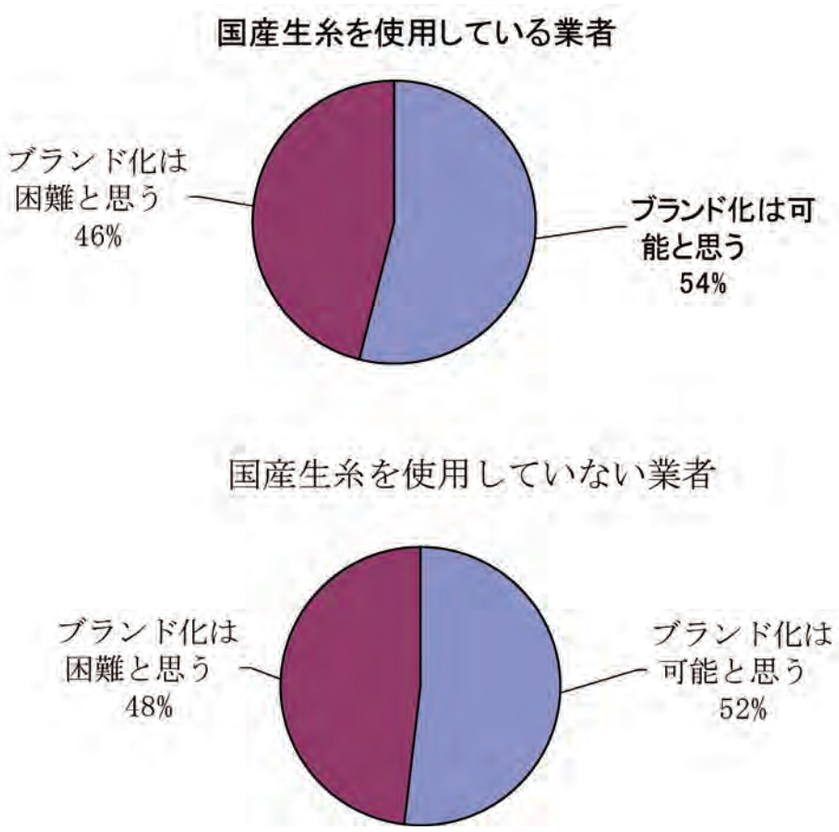
コスト転嫁できるような製品を開発することができるかは今後の大きな課題であ

る。一つの方向としては、①原料繭の産地限定や農家限定などを製品のコンセプトにして、製糸、染め、織り、加工の全ての段階を通じ伝統技術に立脚した高品質な製品を作り出すこと、②純国産を連想させるロゴマークと純国産の希少性、明確な生産履歴、本物優位、こだわりなどをスローガンにして、消費者に強力にアピールすること、③現にあるように有力な販売業者のプライベートブランドの製品素材に採用されることなどにより活路を見出すことなどが考えられる。

（第８図）純国産製品の識別表示の必要性（織物問屋の回答構成比）



（第９図）普通生糸による製品のブランド化の可能性（機業者の回答数割合%）



第３章　純国産絹製品の原料生糸の価格問題

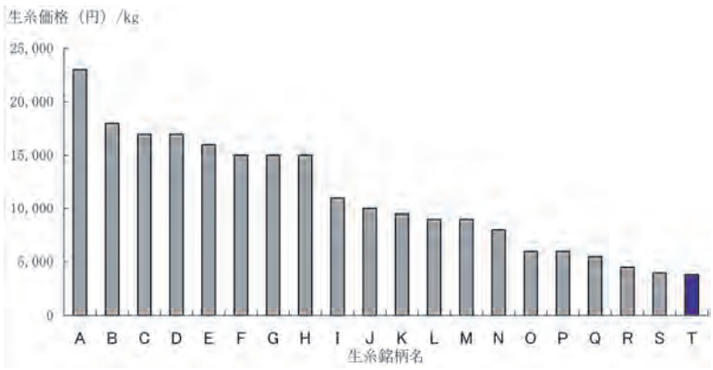
３－１　国産生糸製品の原料生糸の価格設定

厳しい価格設定の現状

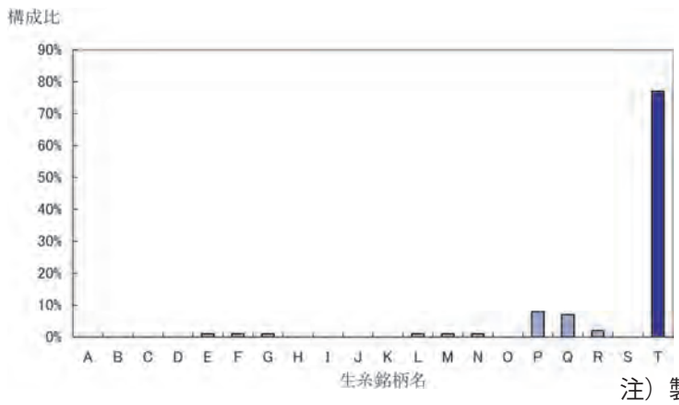
国産生糸の価格を見ると、特殊な原料繭による特殊銘柄生糸は、かなりの程度の価格水準を実現しているが、それでもすべてが生糸生産コストを反映するに十分とは言い難い。第 10 図は、アンケートに答えた 18 年の各製糸の出荷した主要な生糸銘柄の１ｋｇ当りの価格である。このうち、Ｔ銘柄は製糸４社の普通生糸でその価格の加重平均値は 3,900 円。そのほかのＡからＳまでは特殊銘柄生糸の実現価格である。これを見ると製糸経営における平均的な加工販売費を例えば生糸１Ｋ当り 4,000 円ほどかかるとしてそれをカバーでき、かつ、繭代１ｋｇ当り 2,000 円を支払うことができると思われる価格水準である 15,000 円以上の生糸銘柄はわずかに８銘柄である。

また、生糸銘柄別の製糸業者の 18 年の生糸出荷数量を見ると、第 11 図のように普通生糸であるＴ銘柄が圧倒的なシェアを占めている。15,000 円以上の特殊銘柄の出荷数量シェアは全体の数パーセントに過ぎない。これら 15,000 円以上の生糸による製品は、特別の需要者向けやごく少量の特殊な用途に供されるもの、目下、商品化の途上にあるもの、商品試作段階のものなどで、これからの普及展開が期待されているものであるが、数量的となると厳しい状

（第 10 図）　国産生糸の銘柄別取引価格（平成 18 年）

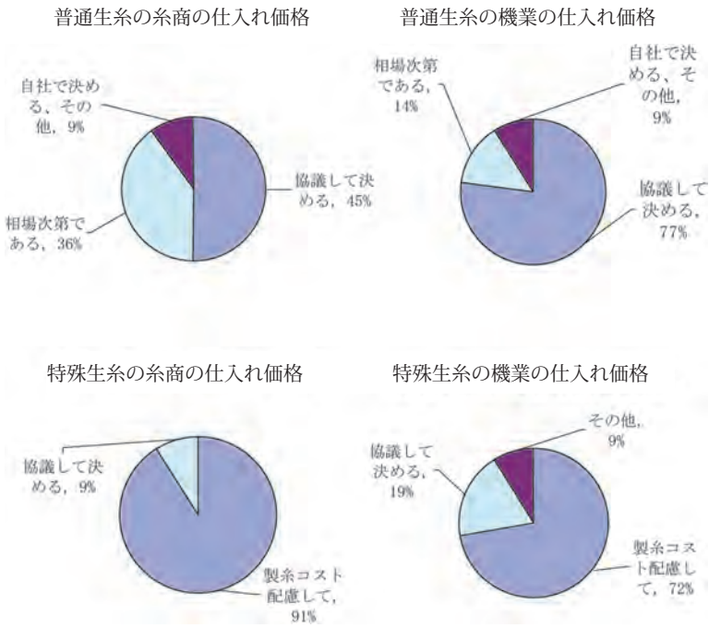


（第 11 図）製糸業者の銘柄別生糸出荷高構成比



注）製糸業アンケート調査より作成

（第 12 図）糸商、機業の国産生糸の仕入れ価格の取り決め方法（回答数構成比）（織物問屋の回答数構成比）



況にあることに違いはない。

以上のように、現実は純国産ブランドとはいうものの原料生糸への支払い価格の現状から見ると、この先、蚕糸業者が期待するような収益配分の実現はかなり厳しいものが予想される。個別のブランドごとの積極的な販促活動等の成果が期待される。

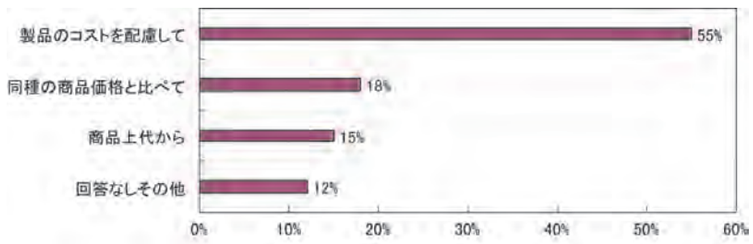
国産生糸価格の形成事情

製糸業者の生糸の売買約定の状況は 18 年のアンケートでは、特殊銘柄生糸は全てが値極先約であるという。普通生糸でも７割は値極、３割が相場を元に協議して決めるという。国産生糸の仕入れ価格の決め方について、糸商、機業の答えは第１２図の通り、普通生糸では「相場を元にして協議の上取り決める」が多く、特殊生糸では「製糸のコストなどに配慮する」が多い。中には「製糸の言い値の通り」というのもあり、特殊銘柄生糸に対しては十分では無いにしてもそれなりの配慮がされているようである。ただし、問題は製糸コストとはいうもののその繭代部分は現在の補填制度の仕組を前提としたものであることに留意する必要がある。

織物問屋の純国産生糸製品の仕入れ価格の決定要素について回答数割合で見ると、その約半数は「製品コストを配慮して」というものであるが、半数はその他の要素を挙げている。コスト配慮というのが決定的なものとなってはいない。

また、織物問屋の小売業者への卸売価格は商習慣やその問屋の販売方針により様々である。一般に小売業者の買取の場合は問屋の卸価格は低く設定、販売委託の場合は高めのようであるが返品リスクを考慮しな

(第 13 図) 織物問屋の純国産絹製品の仕入れ価格



ければならない。いずれにしても流通業者の仕入れ価格は販売業者の上代設定と関係するので、製糸コストなどの製造原価がそのまま通ることにはならない。

(仕入れ価格に関する問屋事例調査の特記事項)

①単に国産生糸を使用している事由だけでは製品価格の引き上げはできない。

②国産生糸価格の大幅引き上げはきもの生産流通各段階に影響が出る。

③問屋の小売店への卸価格は商品上代の半分以下である。

④販売店の買取か委託かで問屋の卸単価は違ってくる。

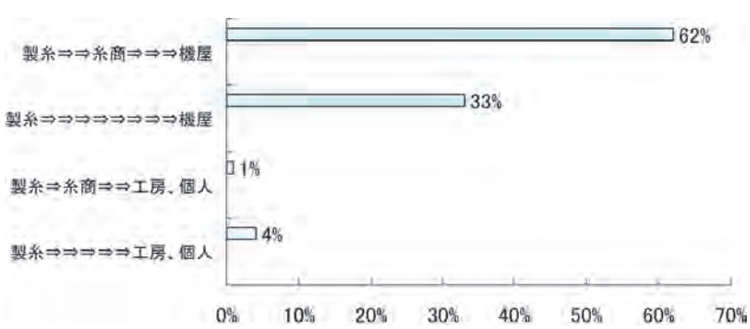
第 4 章　純国産絹製品の生産流通のシステム化の問題

4－1　国産生糸の流通実態

取引は多種少ロットの傾向

国産生糸は 17 年度から全面的に契約生産に移行している。したがって、製糸業者の出荷した生糸は機屋等の実需につながったものとなっている。このことは、これまでのような実需者が必ずしも明確でないような生糸の流通市場は、本質的にわが国の製糸業者がターゲットとするマーケットではなくなっている。製糸業者の生糸生産のコンセプトは必然的に川下業者の扱う製品

(第 14 図) 製糸業者契約先別取引数量割合 (製糸業者アンケート結果より)



の売れ行きや、最終商品のマーケットの状況、したがって消費者ニーズ重視ということにならざるを得なくなっている。

製糸業者が出荷した生糸の流通経路は、糸商を介しているものや、機屋に直接渡るもの、さらには個人の工房などの需要者に販売されるものなど様々である。

製糸業者の直接の取引相手は、これまでは主に糸商であったものが機屋、工房、個人業種などが増える傾向にあり、取引1件当りのロットは少量化している。(第5表)。このような現実の動きを見ると、国産生糸によるものづくりの今後の方向性の一つとして、例えば宮崎県綾町の小石丸製品、長野県岡谷のあし絹、東京多摩シルク21の創作シルク製品などに見られる少量多種の地産地消的な地域ブランドも期待されてくるものと思われる。

(第5表) 製糸業者の取引単位別件数

取引数量単位	取引件数		数量割合	
	普通生糸	特殊銘柄生糸	普通生糸	特殊銘柄生糸
100俵以上	2件	1件	27%	32%
50～100	4	—	26	—
10～50	17	3	27	23
10俵未満	60	102	21	45
計	83	106	100	100

資料：18年度調査報告書より

4－2　蚕糸絹業連携グループ形成の現状

連携グループ化の経緯

これまで生糸の生産は、原料繭品種の大臣指定や繭、生糸の強制検査などの法的制約があり、繭、生糸の取引は、制度で定められた品質規格に基づく格付け取引であった。したがって、生糸の流通市場では価格が最大の競争の要素であり、安価な輸入生糸に次第に市場を奪われていった。この間、製糸業者は各社とも一般の取引基準の品質規格に、特別の要素を加味することによる価格プレミアムの付与を狙った、いわゆる高品質銘柄生糸、例えば藤村製糸の鯨印、カネボウシルクの鐘桜印などのタテ糸用普通生糸や、ハイブリッドシルク用のあけぼの生糸、極細生糸のはくぎん、群馬オリジナル品種の世紀21などの特殊銘柄生糸を生糸市場に投入する等で対応を図ってきた。しかし、量的に全体をカバーするには至らず多くの製糸企業は急激な原料繭の減産もあり経営資源を効率化するに至らないで廃業していった。

蚕糸業法の廃止による繭、生糸の生産や流通に関する規制が無くなったこともあり、残った製糸企業はこれら特殊銘柄生糸による絹製品開発を機業や織物問屋などの業種と組んで進めていくことに活路を見出して行こうということになった。

そして、蚕糸業者の生き残り戦略としては、最終消費市場を目指して、このような関係業者と連携して合理的な生産、流通、販売の仕組をつくることが有力な選択肢との理解がなされるようになったといえよう。

連携グループへの参加状況

アンケート結果によると、現在国産生糸を使用している機業の中で約半数の21社が提携とまで言わなくても、何らかの形で関係業者と組んで織物生産を行っていると

答えている。今後、連携をしたいと答えた数を入れると、現在国産生糸を使用している機業 43 社のうち 35 社が今後、連携の企画に参加してものづくりをやりたいと答えている。

同様に織物問屋の連携の企画に関する意向についてみたものが第７表である。問屋の回答では、今後連携グループに関係してみたいという意向の中には「誰かリスクを取ってくれるなら」というものが多い。また、連携というのでなくて、これまで通りの自社独自の方針で仕入れや販売をしたいという回答は機業も問屋にもかなりあるようである。つまり、連携のメリットを各業種がどのように理解しているかがポイントになる。蚕糸関係業者ではこれにより生産計画や販売価格にある程度のメドが立つことが期待される要素であるが、流通や販売の業者では、特殊な国産原料の確保による製品市場でのシェアの確保、類似製品の排除による自社ブランドの維持の方に目が向いているようである。

（第６表）　川上川下連携の企画への機業の参加の意向

（回答数、実数）

合計	19	34	38	91
	現在、連携に参加している	今後参加してみたい	今後も参加しない及び回答なし	合計
現在国産生糸を使用している機業	19 社	16 社	8 社	43 社
国産生糸を使用していない機業	ー	18	30	48

資料：アンケート調査に回答した機業

注）機業が参加していると答えた主な連携グループは、㈱絹小沢グループ、㈱高島屋・（有）千総グループ、㈱伊と幸グループ、（有）ミラノリブグループ、㈱西陣まいづるグループである。

（第７表）　川上川下連携の企画への織物問屋の参加の意向（回答数、実数）

	現在連携グループに参加している	今後、連携の企画に参加しても良い	今後も参加はしない、独自で仕入れ販売する	合計
現在純国産絹製品を扱っている業者	5 社	13 社	15 社	33 社
現在扱っていない業者	ー	13	15	28
合計	5	26	30	61

資料：アンケート調査に回答した織物問屋の数

（連携に関する機業事例調査での特記事項）

①小売店など販売力のあるところがリーダー企業になって引っ張らないと。

②在庫のもてる資金力のあるところと組む。

③全体を把握できる前売り、小売、デパートがリーダーになるのが良い。

④企画力がある機業はリーダー企業になり得る。パートナーは小売店で良い。

⑤製品開発で設備投資が伴うとリスクが生じる。

（連携に関する織物問屋事例調査での特記事項）

①連携のリーダー企業は問屋メーカーが適当、リスクは分担が筋だ。

②リーダーは資金力のある前売問屋。在庫リスクは応分の負担は必要だがリーダー企業が持つことだ

③メーカーに発注し生地を染めたらそのあとのリスクは前売問屋が持つことになる。

④連携のメリットは原料生糸の確保と消費市場での製品の競争回避によるブランド

の維持である。
⑤薄利多売の方針なので小ロットで高額の企画商品作りは困難

連携グループによる製品開発の特色

連携グループ形成は、これまでのところ多くが特別な原料や技術的に可能な新しいアイデアなどにより製品開発を円滑に進めようとする、いわゆるシーズ志向に基づいたものである。すなわち、連携グループによる製品開発の特徴は、総じて素材生糸の繊度の太さ、細さ、繭品種の由来とか原料、技術や生産方法からのシーズ優先のコンセプトに基づくものであった。

その結果、製品開発に当ってはシーズごとに様々なタイプの連携グループが形成されることになった。現在、例えば山形県が育成した繭品種の松岡姫を素材原料とする㈱伊と幸グループ、同様に群馬県育成のオリジナル蚕品種による（株）絹小沢グループ、栃木県南那須地域産の繭を素材原料とする㈱高島屋関係グループなど大小あわせて 10 ほどの連携グループが存在し、さらに増えつつある。ただし多くは、連携といっても取引上の人間関係のつながりや信頼関係をもとにしていて、特に細かい取り決めなどはしていないという。

ブランドつくりには、消費者ニーズに必ずしも囚われずに独創性や特別な性格付けこそ重視すべきものという考え方がある。つまり、消費者に如何に選ばれるかよりも製作者がブランドに込めるところの価値を消費者に対し、いかに首尾一貫して伝え啓蒙するかが重要だという意見である。これに対し、ブランドとは市場で消費者に選ばれた商品である。消費者に気に入れられた商品だけが残る、その商品がブランドであるとの意見がある。連携グループに見られる方向は、作り手の主張を前面に出すもので前者の意見に沿ったもののようであるが、何れにしてもシーズ開発の努力と併せて、川下業者との連携による一貫した純国内製品であることを強調し、これをどのように消費者ニーズに橋渡しをするかがキーポイントなのである。

蚕糸業者は、ブランド構築や販促などのマーケッティング活動への直接の係わり合いはおのずから限界がある。その役割はもっぱら流通、販売関係の事業者が担っている分野なのであるが、蚕糸業者も連携関係にあるこれらの事業者と国産生糸という希少な絹素材の提供、及び素材特性に関する資料の提供などを通じて緊密に協力していくことが重要である。

流通業者のなかには、純国産ブランドは小ロットで利益の幅も小さいとの理由から、特に大手の業者の関心は低い傾向にある。一方、消費者の本物志向に応えきものは純国産にこだわるというものや、わが国の絹文化の継承は企業の社会的責任（ＣＳＲ）であるとの理念をもって取り組んでいるという事業者もいる。蚕糸業者としても、これら業者と協調を図り価値観を共有しつつ、協同の精神で絹文化の継承、ものづくり産業の振興に努めることが重要である。

連携グループの維持とシステム化

川上、川下連携の事例を見ると、特定事業者が中心となって原料生糸の仕入れから生産、流通のタテの流れの過程を抑えて効率化を目指すものとなっているが、これを一般にいう垂直マーケッティングシステム（ＶＭＳ）の１タイプとして見たとき、連携の内容がほとんど製品開発だけになっていて、最終製品を消費者に届ける販売のチャネルを取り込んだものは少ない。生産から販売まで情報共有のもとに運命共同体的な連帯意識をもった一貫システムを作り上げることが望ましい。

競争の激しいきもの市場では、和装品は洋装品ほどではないが商品の陳腐化などは避けられない。また、売れ行きや小売店の事情で商品入れ替えも行われるところから、連携グループの規模の維持や新たなグループ形成のための蚕糸側の役割として、消費者に魅力ある商品を新たに提供できるように、メーカーなど川下の取扱業者が意欲を持って取り組める新しい生糸素材の開発、提供、あるいはそれぞれの繭・生糸の特長に関する情報の発信などが必要である。

（きもの商品入れ替え年数について織物問屋事例調査の特記事項）

①商品によりけりで作家ものでも１年以上はもたないものもある。
②４～５年くらい。売れ残りは廉価で処分。
③買取はわずかだがその場合、３年くらいをメドで処分 (百貨店)。
④自社ブランドは長くもたせる傾向。

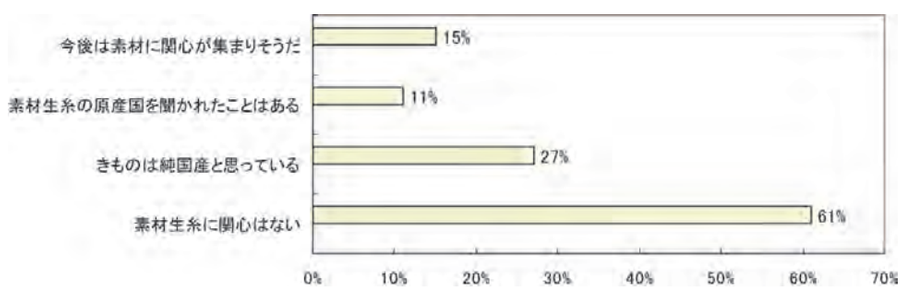
第５章　純国産絹製品の販売促進

５－１　販売業者に見られる現状

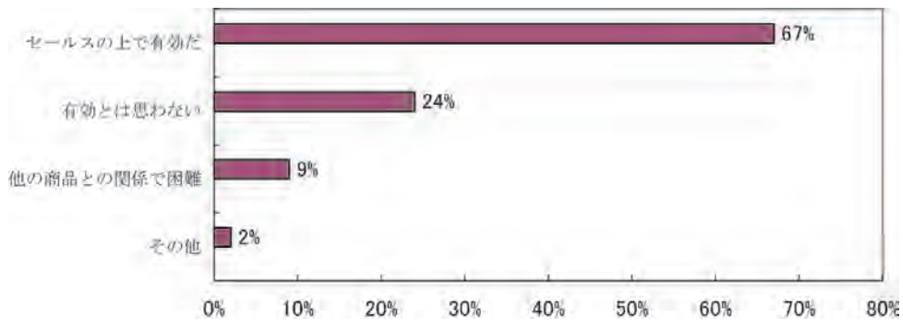
純国産きものへの関心の程度

小売店などの販売業者は、一部のブランド品を除いては、純国産であることを明確に認識しているものや関心をもっているものは少ない。わが国で織、染め、加工したきものはすべて国産のものとして扱っており、きもの素材の生糸の原産国を重視し詮索する業者はほとんどいないのが現状であ

（第 15 図）　消費者の純国産きものへの関心 (小売店複数回答率)



（第 16 図）　小売店の純国産表示に対する意見 (複数回答率)



る。アンケート調査で回答のあった小売店 56 店の内，純国産商品を取り扱っているという店は 30 店であったが、よく分からないという店が 13 店あった。

第 15 図は小売店での純国産きものに関する消費者の関心の程度を見たものである。アンケートに答えた 56 店のうち「消費者はきもの素材の生糸原産国までは関心を示さない」というのが６割､きものは「純国産と思っている」というのは３割。つまり、小売店は、客はきものに関する限り、国産、純国産の差異をほとんど意識していないものと見ている。

また、小売業者は自社の商品は全て国産製品と認識しているなかで、純国産製品を販売する場合、他の国産製品と差別化のための表示をすることについては、７割の店がセールス展開の上で有効であると答えている。

商品に消費者が識別できるように純国産のマークを付けることについては、当該商品のセールスの上では有効との答えが多いが、実際にこれを実行するとしたらどのような問題があるのかを調査したところ、小売店には次のような２通りの意見のあることが分かった。

①純国産の表示は売り場に混乱をもたらしかねない。今は売り場の正絹ものは全て国産ということにして、素材生糸の原産地までは敢えて触れないことにしている。

②この際、純国産の表示を行い素材生糸の違いまで明らかにすべきではないか。
したがって純国産表示の実施及びその効果が得られるようにするには、小売業の理解と協力を得ることが必要である。

５－２販売業者への働きかけ

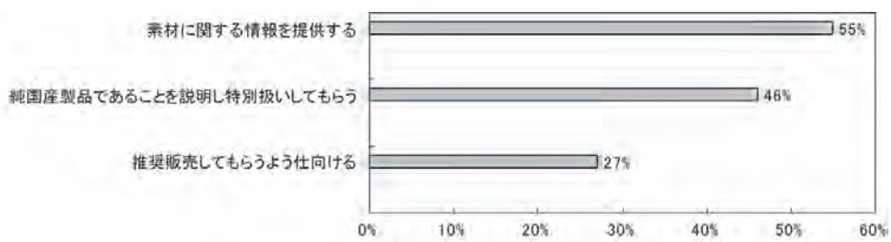
販売促進のプロモーション活動では、ブランド名やそのコンセプトを伝える手段として、またその効果からもマスメディアの力は大きい。しかし、きもの専門雑誌への広告やテレビコマーシャルのような経費のかかる宣伝広告は、スケールの小さい個別のブランドにとっては手に余る。それよりも、メディアに対しては季節の風物詩とし

て養蚕の記事を取り上げてもらうとか、絹のものづくりの地域での取り組みなどを社会性のあるニュースとしてもらうなどを通じて、純国産絹ブランドを紹介してもらう等のようなパブリシティ活動（ＰＲ）の方が有効と思われる。しかし、これらも個別企業が取り組むものとしては無理があり、この面で近く発足予定の蚕糸・絹業提携支援センターの情報提供活動の一環としての取り組みに期待したい。

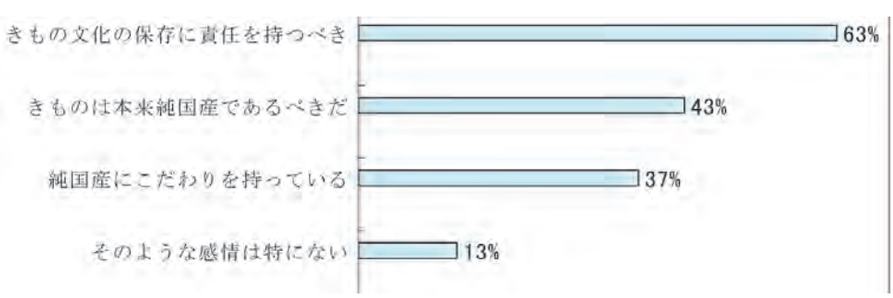
広告宣伝など購買者への直接的働きかけのほか、販売業者に対して純国産製品を積極的にセールスするように働きかけを行う、いわゆる販促におけるプッシュ戦略が効果的と考えられる。高額商品を扱う場合、販売スタッフのセールストークや推奨販売力が売れ行きに重要な役割を果たすといわれるからで、店員に純国産絹製品に関するメッセージ、情報を十分伝達することが肝要と思われる。さらに、最近、小売業者がインターネット通販に参入するケースが多くなり、その利用も増えつつあるといわれている。これらのことも純国産絹製品の販促の一環として検討する必要がある。

第 18 図に見られるように販売店の中には、「純国産にこだわりをもっている」も

（第 17 図）　小売業者への働きかけ（織物問屋の複数回答比率）



（第 18 図）　小売店のきもの産業振興に関する意向 (複数回答割合)



のや「わが国のきもの文化の保存の観点から、純国産きものづくりに関し特別の感情をもっている」との好意的な答えも多い。一般消費者向けに、純国産絹製品の希少性や特長を理解させ、また、国内の絹生産の現状、絹のもの作りの過程、蚕糸業や絹文化の歴史を認識させる等の努力も必要である。

第６章　結　び

これまで論じてきたように、蚕糸業構造改革の基本方向は、純国産絹製品のブランド化を目指して関係企業、事業者が連携し共通意識の下にものづくりを行い、合理的な流通チャネルを通して販売し適正な収益の配分を目指す蚕糸絹業提携システムを構築することである。

このような理解の下に、蚕糸業に起点をおいた場合、その実現にかかわる課題、推進方策を述べると以下の通りである。

６－１　純国産ブランドの確立にあたって

ア、純国産ブランド確立に共通するキーポイントは、まず製品品質の保証に基本をおくことである。基本的に高品質でないものはブランドになり得ないのである。次に品質以外の感覚的、観念的な意味や解釈等の要素も重要である。このことについては、当該ブランド作りに関係した製糸業、絹織物業、着物メーカー、流通、販売業などが同じ意識をもって、作り手や取り扱い関係者の純国産への思い入れ、こだわり、製品にまつわるストーリー等を消費者に伝え、その結果としてブランドとしての付加価値が高まるようにすることが重要である。

そのための具体的なものとしては、純国産という出所起源を連想するようなネーミングとスローガン、生産履歴を表示したロゴマークが必要である。

イ、ブランド化は企業、事業者が競争市場に個別に対応する製品戦略である。それぞれの連携グループにとっても同様であり、グループごとにブランドコンセプトは異なる。したがって、グループの製品ブランド力や市場における販売パワー次第でその影響が製品素材の繭、生糸の価格にはね返ることになる。しかしそれは、ブランドを構築した連携グループ内の問題であり、個別に組織内で解決さるべきものと考えられる。

ウ、特殊な原料繭・生糸による製品開発ばかりでなく、現に大勢を占めている定番の普通生糸による製品のブランド化を如何に進めるかである。普通生糸による製品のブランド化に当っては差別化の表現が特殊銘柄生糸の場合に比べて難しいが純国産である原料繭・生糸の価値や特長を生産履歴の明確化とともに消費者に訴えることができると思われる。産地限定などによる原料繭や生糸の厳選で製品の高品質化と適切なネーミング、ストリー性をもたせることなどでブランド化を図る方向が考えられる。

エ、ブランドには他の類似の製品から識別するという基本的な機能がある。純国産製品であることを消費者に認知させる手段

として、ネーミングと並んでロゴマークなどの識別表示による方法が重要な役割を果たす。消費者の本物志向に訴えるためにも純国産の表示は重要であるが、小規模の個別ブランドごとにこれを実行しても容易に市場には受け入れられない。権威付けのためにも、第３者機関による認証、表示の仕組を新たにつくる必要がある。

オ、蚕糸関係サイドからは、川下事業者の中に純国産ブランドつくりに取り組もうと意図する意欲的な事業者が増えるよう、情報の提供をはじめあらゆる機会を捉えて働きかけを行うことが重要である。また、性格付けの可能な特長のある高品位の生糸の開発及びその安定的な供給に努める必要がある。

６－２　蚕糸絹業提携システム形成のあり方

ア、連携関係の構築には製品開発関係業種のみならず、販売業種との連携による製品の販促にも重点を置いた一貫したシステムを形成することが重要である。

連携の企画に際してはリーダーとなる事業者が中心となり、製品開発の初度投資や流通過程のリスク等の分担関係を明らかにすることが肝要である。

イ、提携システムの維持、存続のためには、構成メンバーの事業者がそれぞれのビジネス行為の結果として適正な収益が確保されることを基本におくことが重要である。

ウ、一般の企業における製品ブランドの構築には、社内でのブランドすべての活動を統一的に把握し、それら諸活動を調整し、さらにはそのブランドの業績に責任を持つというブランドマネージャーが導入されているといわれる。連携グループにおけるブランド構築に当たって、関係事業者の活動を統括するブランドマネージャー的な役割を果たすリーダー事業者としては、商品企画力、資金力と製品販売力をもった織物業者、流通業者、販売業者が適しているものと思われる。ただ、リーダー事業者となる川下事業者が全て養蚕、製糸の事情に精通しているとは限らない。場合によっては、川上と川下の関係事業者の間を仲介斡旋、調整することができるコーディネーター的な役割を果たす者の存在が必要である。

エ、蚕糸関係サイドからは、連携推進に関し、川下事業者の仕掛けに期待をかけこれに依存するのでなく、自ら積極的に働きかけることが重要である。そのためのアプローチとしては、特長ある繭、生糸の開発、新たな生産方法のアイデアの提案など技術シーズの開発を進めるとともに、国産生糸に関する情報の伝達、意見交換、生産現場の紹介などに努め、織物生産、流通、販売業種との信頼関係の醸成により川下事業者の製品開発、商品化の企画への取り組みを促すことが肝要である。

オ、連携グループによる製品のブランド化のため、例えば特定の蚕期の繭生産だけが求められると、養蚕経営の資源配分の変更や技術体系の変更を余儀なくされることにもなる。また、多種少量生産が求められると蚕種業や製糸業の生産効率にも影響が

出る。このような個別のブランド化の動きと持続経営体としての蚕糸業各経営との調和を図ることが必要で、さもないと今後、繭生産基盤の更なる縮小とならないかが懸念される。

６－３　純国産ブランドの販売促進

ア、ブランド製品の売れ行きを確保するには、消費者に製品の品質特性など純国産ブランドの価値を十分伝えることが重要である。このため、流通業者や小売業者に対して、開発した製品に関する情報の提供を行うとともに消費者に対しも分かりやすく伝える手段、メッセーを提供することが重要である。

イ、マスメディアに対し、話題性、社会性のある情報として純国産絹のものづくりにかかわる情報等を提供し、広報宣伝してもらうようにすることも効果的と思われる。

６－４　蚕糸絹業提携システム形成のための支援

ア、蚕糸絹業提携システムの形成に当っては、次のような政策的支援が必要と考えられる

①、養蚕、製糸業者に対しては、連携システムが確立し適正な収益確保が図られるまでの間の原料繭代の補填、ブランド化を図る生糸の安定供給のため養蚕、製糸、蚕種関係の機械、施設の改善に関する経費等への支援

②、連携を企画する事業者に対しては、関係業者との話し合いや情報の交換、新製品開発、商品化にかかわるソフト経費等への支援

イ、上記の支援の具体的内容については、近く発足予定の蚕糸絹業提携支援センターの取り組むべき事業内容として明らかにされることになるが、特に重要と思われる情報の発信、ブランド製品の販促関係等の細目について述べると以下の通りである。

①蚕糸、絹業関係者からの質問、要請等に応えるための電話相談窓口の設置。

②インターネットホームページによる情報の発信および掲示板からの情報収集。

③純国産絹製品ブランド化の動きなどのメディアへの情報提供。

④国産繭・生糸や純国産絹製品に関する消費者向けの宣伝パンフレット作成、携帯電話からの商品情報読み取りＱＲコードの導入等、絹業関係者の販促活動への支援。

⑤純国産絹製品の地域ブランド化の動きについて状況把握に努めるとともに、関係する事業者や工房関係者との連携。

最近の海外生糸・絹糸の糸特性について

京都府織物・機械金属振興センター
織物室　主任　井澤　一郎

当センターの研究成果を紹介します。

1　はじめに

現在、日本で消費される生糸、絹糸のほとんどは海外からの輸入に頼っており、輸入量の約７割は中国、その他はブラジル、ベトナムなどからの輸入です。特に近年は製造コストの面から海外で撚糸した絹撚糸、完成撚糸の輸入量が増加しています。その糸の品質は、製品の良否を左右するのはもちろんのこと、準備工程の作業性においても重要な項目です。

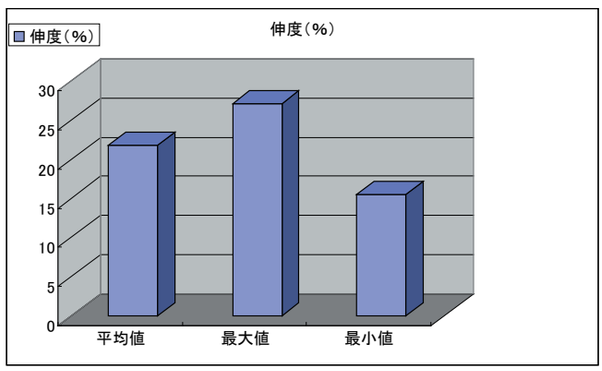


図１　伸度　生糸 26 中×１本

当センターの技術相談においても糸の品質に関わる相談が多いことから、最近の生糸、絹撚糸、完成撚糸の物理的、化学的、形状的性質について試験を行ない、その結果と合わせて現在の生糸検査の問題点について調べました。

2　結果と考察

物理的性質について

図１は生糸 26 中（中国　山東）の引張り試験における切断伸度の結果です。平均値は 21.8％と一般的な値ですが、最小値は 15.6％と伸度が非常に小さい部分がありました。

生糸検査表 (原産国検査検査証のこと。以下同じ。) には平均値のみの記載しかありません。糸は一番弱い部分で切断するので、平均値以外にも最小値やデータのばらつき度合いを示す標準偏差の値が大切になります。

絹撚糸、完成撚糸における強伸度結果は、最低値に着目すると 15％以下のものがありました。合糸不良で構成する糸の長さに差があることから、一番短い糸１本だけに負担がかかることによって起こります。

検査表の品質等級と強伸度の関係ですが、等級と強伸度の良否は関係無いようです。

図２　生糸の練減率

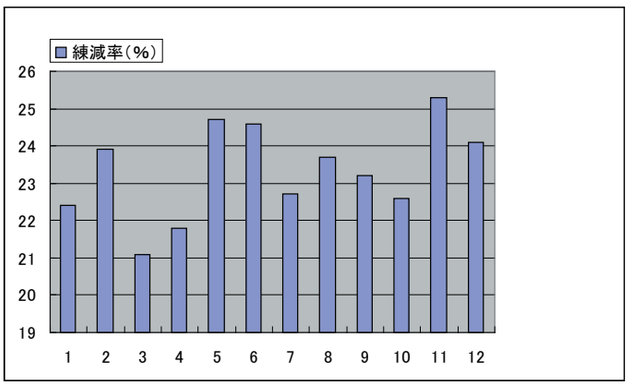
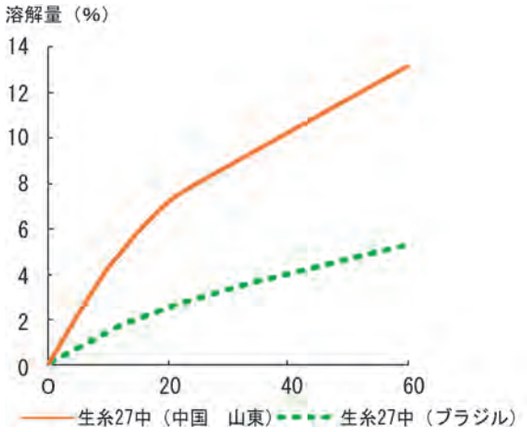


図３　生糸のセリシン溶解性



完成撚糸における撚数検査結果ですが、駒撚糸において上撚数は 1200 T／M程度でサンプル間に大差はありませんが、下撚数は 1500 ～ 1800 T／Mで差がありました。下撚数が少ないと上撚数との差がアンバランスとなり、糸に捻(ねじ)れが発生しやすくなり、タテ筋欠点に繋がるローリングを起しやすくなるので、下撚数についても注意が必要です。

化学的性質について

図２は生糸の練減率試験結果です。最低値が 21.1％、最大値が 25.3％でばらつきがあります。練減率の差は織物風合に大きく影響を及ぼします。

図３は生糸のセリシン溶解特性試験結果です。セリシンの溶けやすさに大きな差があり、60 分後の溶解量には最大約 2.5 倍もの差がありました。よって緯煮(ぬきだき)（セリシンを軟和し、引き揃い糸を抱合、密着させて加熱し易くするために、沸騰している湯槽に引き揃い糸を一定時間煮沸する八丁撚糸独特の工程）する場合には、時間調節が必要になります。蚕品種、殺蛹方法によってセリシン溶解特性は異なりますが、高熱を受けたセリシンは溶けにくくなりますが、ブラジル産は中国産と比較してセリシンは落ちにくい傾向があります。

形状的性質について

目視と関係の深い黄色度（値が大きいほど黄色が強い）を調べた結果、4.46 ～ 37.31 とかなりの開きがありました。ハイドロ未使用の精練後においても、2.36 ～ 9.34 と差が認められましたが、ハイドロ使用の場合には、2.36 ～ 6.55 と差は小さくなりました。

3　まとめ

物理的、化学的、形状的性質について試験を行った結果、サンプルによって性質が大きく異なり、原料のロット管理の重要性が改めてわかりました。また品質の判断基準となる海外の生糸検査についてですが、次の点で問題があると思われます。

① 繊度については繊度偏差、繊度最大偏差等の項目があるが、引張り試験の強度、伸度とも

に最小値や平均値からのデータのばらつき程度を示す標準偏差値の記載がない。
② ヤング率の記載がない。（ヤング率は作業工程における張力管理を知る上で重要であり、ヤング率の値によって扱い時の張力を考慮する必要がある。）
③ セリシン溶解特性や油剤特性など化学的性質を表す項目が無い。

生糸ユーザーの立場からすると、これらの点について新たな項目の必要性を感じます。

また絹撚糸、完成撚糸においては検査が義務づけられておらず、撚数や原料生糸の品質などについても検査証の必要性を感じます。

今後も生糸を消費する側から糸の品質について提案できることがあれば、おこなっていく予定です。

※京都府織物・機械金属振興センター、平成 20 年 5 月 28 日付発表の研究成果紹介による。

国内産地情報
絹織物産地の概況（５月）

産地によっては商いが鈍く在庫の整理で生産調整が続く

＜原糸＞

ブラジル生糸の大幅値上げと、中国生糸の高値移行で、輸入物はしっかりした展開であるが、国内の市況悪から原糸の買付け意欲は貧しく、原料手当は極めて慎重な対応であった。

＜白生地＞

・丹後の生産は、前年比 111％となり市況不振の中でも健闘している。しかし、ＮＣの縮小で売渡しに苦慮しており、工場閉鎖等の噂も出現している。
・長浜の生産は、前年比 81％と集散地からの引合いが鈍く前年を大幅に下回る生産反数であった。色用、黒用ともに厳しい。
・五泉の生産は、前年比と同数でほとんど横這いであった。
・福島は、和装、スカーフともに低調で受注量が減少している。
・福井は、受注品中心に生産し、小売店の店舗縮小により注文量が激減している。
・岐阜は、織物生産は見込み生産を含め現状維持を続けている、売行きは多品種の在庫をもって注文即納品と言う取り組みである。
・群馬・埼玉は、ＮＣの縮小化で商いが細り昨年実績を大きく下回っている。

＜先染織物＞

・西陣の帯は、小売店数社の規模の縮小等により、流通段階で在庫気味で、全体的には低調であった。安価なものだけが比較的健闘している。
・山梨は、ネクタイは一部に動きはあるものの全体としては低調である。服地はそれなりに好調を維持している。
・博多は、袋帯の生産は伸びているものの、紋八寸は大幅に減少している。
・十日町は、振袖、留袖以外は全て前年を下回るという厳しい状況になっている。
・米沢は、呉服は女物着尺、おしゃれ帯等の新作物に多少の動きあり、服地は一服状態である。
・西陣のネクタイは、西陣は秋冬ものの本格的な発注が待たれるが、まだまとまった発注はない。一部では先行発注も聞かれたが数量は予測を下回ったようである。

※（社）日本生糸問屋協会月報 20.6.12 第 709 号による

海外シルク情報

中国

中国最大の繭生産基地・広西自治区の製糸業

中国シルク産業の最大の国家戦略「東桑西移」プロジェクトが本格化しており、中でも最大の成果をあげていると言われるのが広西壮族自治区であるので、同自治区の最近の蚕糸事情にスポットを当てる。同自治区の桑園面積及び繭生産量は、それまで 10 年間最大であった江蘇省を 2005 年に抜いて全国一となり、2007 年には桑園面積 200 万ムー（約 13 万ｈａ）であり、中国の全桑園面積の約 15％を占め、同年の繭生産量は、205,163 トンとなり中国全体の 26％となり、国の支援及び主要先進産地の投資・指導を受けた結果、いずれも首位の座にある。しかしながら、同自治区の製糸業においては、国の認定を受けた製糸工場が 54 企業稼働（新たに最近 10 工場認可設立）しているものの、約 7 万トンの原料繭しか自治区内で消化出来ず、ここ数年約 66％の原料繭は浙江、江蘇などの他地域へ移動・販売されているのが実態である。また同時に同自治区内の製糸工場の生糸品質に対する意識は低い。

浙江、江蘇省の製糸工場の約 60％はＩＳＯの品質管理の認定を受けているのに対し、同自治区内の製糸工場でＩＳＯの品質管理の認定を受けた工場は皆無であり、ましてや中国ブランド製品国家検定をクリアーしている工場は一つもない状況である。従って、同自治区内の製糸工場で造られる生糸は、国内の浙江、江蘇等の織物工場に販売されても、一般的に緯糸にしか使用されず、価格も浙江、江蘇生産生糸に比べ大幅に安い（30 元／キロ位安い）物になっている。

この様に広西壮族自治区の製糸業にとっては、まず自治区内で原料繭を 100％消化すべき製糸能力の大幅アップと同時に製糸工場における高品位生糸の生産態勢の早急な確立が望まれており、いまだ多難な途上にあると言える。

※（社）日本生糸問屋協会月報 20.6.12 第 709 号による

シルク豆辞典

シルクの豆辞典（16）

世界最古の絹織物

― 五千年前の羽二重様の絹 ―

信州大学
名誉教授　嶋崎　昭典

古代人は、よい織物作りのコツは「できるだけ細くて長くて強い原糸を手に入れ、それらを引き揃え合わせて太目の織物用の材料糸をつくること」と言う繊維加工の根本原理を会得し、極細の繭糸を見つけ、生糸を繰りため、美しい絹織物づくりを始めたと伝えられています。そして五千年ほど前にはすでに現在の羽二重様の絹織物を作り、三千年前には「綺（き）」という織り模様のある絹をつくっていたと出土品は語っています。

1．織りへの道　　ー六千年の昔―

縄ない　ー狩猟の道具づくりー

繊維加工の初めは、いまから 15 万年ほど昔の旧石器時代、世界各地で自然発生的に始まったといいます。それは衣料用でなく、狩などの道具づくりに必要な縄ないにあったようです。

草や蔓，木の皮を叩いて分繊させた後、それらを束ねてなった縄は柔らかくて軽くて強いので、縄で作られた罠や投石索（とうせきさく）（図 1）は蔓などをそのまま使ったそれまでの道具に比べ、格段の威力を発揮したことと思います。

図 1　投石索による狩猟
『陳維稷。中国紡織科学技術史（古代部分）。文献 1』

骨針の出現　ー衣服を纏うー

1930 年、中国北京市郊外の周口店竜骨山にある山頂洞人の遺跡から長さ 8.2、幅 0.3 センチメートルの、また頭に 1 ミリメートルの小さな目を持った骨針が出土しま

図 2　山頂洞人の骨針による衣料作り
『紡織史話。上海市紡織科学研究院』

した。

初めに使われた細い繊維は動物の筋ではないかと言われていますが、骨針の出現は、３万年以上の昔、山頂洞人がすでに針で毛皮を縫い合わせた衣服を身に纏っていた（図２）ことを伝えているといいます。

細糸作り　－精練・紡績の始まり－

骨針の目を通す細糸はそれまでの縄ない方式では出来ません。そこで木の皮などを水に漬けて腐らせたり、弱いアルカリ性の灰汁（あく）の中で煮たりして繊維の素だけを取り出す精練（せいれん）技術がうまれました。そうして求めた繊維の素は細いが短い。そこで、短い糸どうしを絡ませて紡ぐ紡績法（図３）が工夫されました。

図３　古代の紡績（文献 1）

編みから織りへ　－織り機の発明―

1972 年、中国江蘇省呉県草鞋山（そうあいざん）遺跡から六千年ほど前の葛布が出土しました。その糸は葛の短繊維に S 字の撚りをかけた紡績糸２本を合糸したもので、１センチメートルに縦糸 10 本という粗い布でした。

調査によると、平行に並んだ縦糸の間を骨針が縫うように横糸を織りこんだもので、山形と菱形の模様が編み出されており（図４）、骨針編みでなければ出来ない布とのことです。

これは、平行に並んだ縦糸を１本置きに引き上げて出来た隙間に緯糸１本を通し打ち込む、能率的な機械（はたのからくり）法が発明される切っ掛けを与えたものとのことです。出土の葛布はそうした編みから織りへの技術移行を伝える大変貴重な資料とのことです。

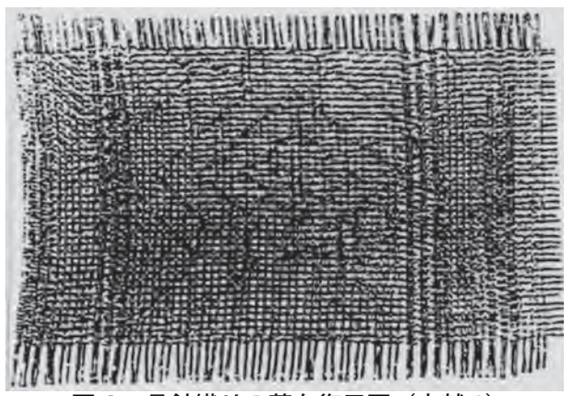


図４　骨針織りの葛布復元図（文献 1）

２．遺跡の絹　－五千年昔の絹－

1958 年、中国浙江省呉興県の銭山漾（せんざんよう）遺跡から 4700 年ほど前の絹の織物が出土しました。繭糸についての調査報告書は三つの特徴を伝えています。

その一つは、繭糸の横断面は三角形のオムスビ型で、いまの家蚕繭糸と同じ形とのことです。長い年月カイコの品種改良がすすめられても、もって生まれた繭糸の姿は五千年経っても変わらなかったようです。

その二は、糸に撚りがないことです。撚りかけしなくても縦糸に使えるほど長い糸を繰りとる技術がすでにあったことを語っ

ています。それを裏書するように、草箒が２本一緒に出土していて（図５）、これは現在繰糸の初め繭糸の糸くちを捜すとき使う索緒箒に酷似していると言うのです。その絹織物は繭糸 20 本ほどを合わせた太糸が使われ、１センチメートル当たりの縦糸密度 53 本、緯糸 48 本のしっかりした美しい羽二重様の絹織りものでした。

その三は、糸はすべすべして光沢があり、精練された練糸から出来ていたことです。

五千年の昔　古代人は繭から生糸を繰り、羽二重様の練った絹を作る高い技術水準に達していたと遺跡の絹は伝えています。

３．織り模様の絹　―殷代の綺―

中国河南省安陽県大司空村の殷代墓から出土した玉刀の柄に、［綺］と言われる地模様のある絹織物が付着していました。経、緯が 28 × 27 本 / センチメートルの織密度で、横向きの［雷紋］が織り出されていました（図６）。三千年の昔、簡単な居坐機（いざりばた）を操った模様織りが行われていたのです。その模様は、そよ風や体の動きにつれて、真珠色に浮かび出たかと思うと、すうと消えていきます。その光の描く動画の不思議さ美しさは真この世のものとは思えませんでした。可愛い子連れの鹿が見え隠れに丘陵を越えていく麗しさを思わせるものでした。人々は[綺]の美しさを[綺の麗]、綺麗というようになったといいます。綺麗はそうした模様織りの絹を称える言葉だったと辞典は伝えています。

カイコの吐く極細の繭糸が織り成す美しい絹織物は、有史前すでに現代と変わらぬ密度の高い絹織物となり、三千年以上まえに美しい織り模様のある綺麗な絹となって古代社会に文化の香りをあたえていたのでした。

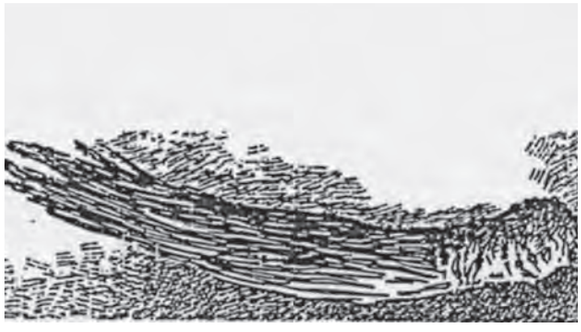


図５　銭山漾出土の索緒箒（文献 1）

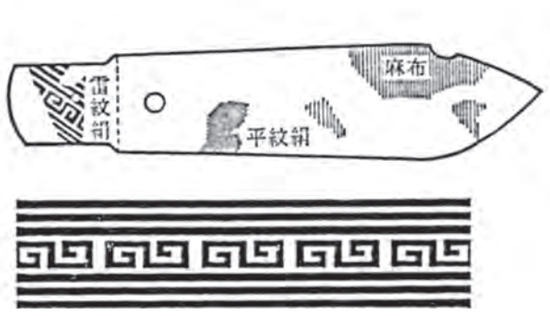


図６　殷代雷紋の綺
（繆良雲。中国歴代絲綢文様）

イベント情報

イベント名	企画内容および展示内容	開催期間	場所および主催者
特別展示 「ちりめん創作人形展」	小紋や友禅などに使われている「ちりめん」は、しぼと呼ばれる布表面の凹凸によって絹の柔らかさに立体感を加えているのが特徴。「ちりめん創作人形」はこのちりめんの古裂などが使われ、何ともいえない趣と風合いが魅力的。 今回は創作人形作家・竹本京さんの作品を中心とした3回目の展示会で、ちりめん創作人形やちりめん細工等約100点を展示する。 観覧料：一般200円(160円)、大高生100円(80円) *( )内は団体割引(20名以上)の料金、中学生以下及び身体障害者手帳等お持ちの方とその介護者1名様無料	平成20年6月7日(木) ～7月14日(月)	会場・主催・お問合わせ 群馬県県立日本絹の里 〒370-3511 群馬県高崎市金古町888-1 Tel:027-360-6300 Fax:027-360-6301 http://www.nipon-kinunosato.or.jp 協力 人形工房 竹本 京
2008京都・西陣織展	①史料展(几帳、能装束、各種掛軸等の展示) ②ミニ手織体験(7月2日～4日) ③西陣爪掻本綴織の実演(7月2日～4日) ④十二単・舞妓の装い着付け体験(7月5日～7日) ⑤小学生作文展	会期 平成20年7月2日(水) ～7月31日(木) AM11:00～PM7:00(火曜日休館)	会場 蝶屋染織美術館（久留米市中央町) 主催 西陣織工業組合 共催 京都府、京都市等 後援 福岡県、久留米市等 問合せ先: 西陣織工業組合 Tel:075-432-6143
第14回絹まつり	ジャパンシルクセンター恒例の夏季特別セール。多数の絹愛好家の皆様をお待ちしております。	平成20年7月7日(月) ～7月9日(水) AM10:00～PM6:30 最終日 10日 AM10:00～PM5:00	会場 ジャパンシルクセンター 東京都千代田区有楽町1-9-4 蚕糸会館1階 主催（社）日本絹業協会 Tel & Fax:03-3215-1212
手作り真綿の 実演と講習会	古くから日本の養蚕農家では生糸の製造に適していない玉繭や出殻繭などのくず繭を使って真綿を作ってきました。 真綿は軽くて保温が良いため、防寒用やふとんの中綿、夜具地の引き綿として使われたり、紬糸の原料になり、家族の着物などに大切に利用され、日本人の生活に役立ち、また現在では高級紬織物の大切な原料となっています。シルク博物館では、この真綿作りの貴重な技術を次の世代に伝えるため、「手作り真綿の講習会」「こどものための小さな真綿作り」及び「真綿と太糸作り実演と講習」を開催する。 入館料:一般500円(400円) シニア(65才以上)300円(200円) 高・大生200円(150円) 小・中学生100円(50円) *( )内は団体割引(20人以上)の 料金*障害者は無料	△「手作り真綿の講習会」 平成20年7月9日～11日 △「こどものための小さな真綿作り」 平成20年7月20日（日)、27日（日)、29日（火）8月3日（日)、5日（火)、10日（日)、12日（火)、17日（日) △実演「太糸作り実演」 平成20年11月22日（土)、23日（日)、29日（土)、30日（日) 12月6日（土)、7日（日) △実演「まわたの太糸指編み実演」平成20年7月13日（日)、21日（月)、11月24日(月) △実演「手紬糸作り実演と講習」 平成20年7月12日（土) 講習会、21日（月） 実演、10月18日（土)	会場・主催・お問合わせ シルク博物館 〒231-0023 神奈川県横浜市中区山下町1番地（シルクセンター2F) Tel 045-641-0841 http://www.silkmuseum.or.jp/ 後援 （財）日本真綿協会
染・織で綾なす 「日本の絹展」	企業、染織作家・工房などの和装、洋装の純国産絹製品を中心にして、これに日本の伝統文化を代表するきもの、帯などと全国各地の伝統工芸品から斬新な洋装品までを一堂に展示し、その素晴らしさを紹介する。 特別出展 深雪アートフラワー 実演 紡ぎ、織り、真綿作り 農工大学蚕学教室による蚕の飼育の実演	平成20年7月23日(水)～28日（月）	会場 東京・日本橋高島屋8階催事場 主催 （社）日本絹業協会 後援 （財）大日本蚕糸会、 （社）日本絹人繊織物工業会、 （社）伝統的工芸品産業振興協会

イベント名	企画内容および展示内容	開催期間	場所および主催者
2008 Silk Summer Seminar in Okaya 第 61 回製糸夏期大学	製糸夏期大学は昭和 23 年開催して以来、毎年、全国から延べ 250 名余りの皆様に参集して頂き、シルク関係の研修会（講演会）では最大かつ、最も伝統あるものといわれています。 つきましては、多数の皆様のご参加をお待ちしています。 【第 1 日目】13：30～13：40　開講のことば 13：40～15：00　蚕糸・絹業提携支援緊急対策事業の取組について （財）大日本蚕糸会　常務理事　草野洋一氏 15：20～16：10 蚕糸・絹業における川上・川下連携推進事例 （株）千總　製作部副部長　俵　武司氏 16：20～17：20 日本の「着物」と「染織」の美しさ ハクビ京都きもの学院　院長　角谷美和子氏 【第 2 日目】9：00～9：50 遺伝子組み換えカイコによる機能性シルクの開発 （独）農業生物資源研究所 研究センター長　田村俊樹氏 9：50～10：40 フィブロインスポンジによる再生軟骨の開発 東京女子医科大学八千代医療センター 講師　寺田伸一氏 11：00～11：50　百貨店における絹呉服の動向 ～時代のニーズと変化の対応～　（株）高島屋 MD 本部　呉服 DV ディビジョン長　池田喜政氏 11：50～　閉講のことば 13：00～　見学会（マイクロバス他使用）ホテル岡谷→（株）宮坂製糸所→市立岡谷蚕糸博物館→イチヤマカ旧林家→岡谷駅（17：00 着） 参加費：1,000 円　教材費：2,000 円 懇親会費：6,000 円　見学会費：1,000 円	平成 20 年 7 月 24 日(木)～7 月 25 日(金)	会場 ジョイントプラザ マリオ 長野県岡谷市長地権現町 3-2-45 Tel & :0266-28-8740 主催 （独）農業資源生物資源研究所・製糸技術研究会 協賛 岡谷市・蚕糸懇話会 事務局 （独）農業生物資源研究所 生活資材開発ユニット内 〒394-0021 長野県岡谷市郷田 1-4-8 お問合せ・申込先 Tel:0266-22-3664 Fax:0266-22-3094 E-mail: silkseminar@nias.affrc.go.jp
「丹後きものまつり in 天橋立」	丹後のきものまつりを天橋立一帯で開催する。	平成 20 年 10 月 26 日(日)	会場 天橋立文殊地区一帯 主催 丹後織物工業組合 Tel:0772-68-5211
かながわシルクフェア 2008	神奈川県では、県内シルク産品を広く県内外に紹介し、その普及を図るため、シルクフェア(シルク製品の展示・販売、機織り、組紐の体験、カラーコーディネイト、スカーフの巻き方教室など)を開催します。 *体験は、土、日に実施、一部のもの有り。	平成 20 年 11 月 1 日(土)～9 日(日) 10:00～18:00	会場 シルクセンター国際観光会館地下 1 階イベントスペース 主催 かながわシルクフェア実行委員会 協賛 （社）日本絹業協会、 （社）日本生糸問屋協会 後援 （財）大日本蚕糸会、 （社）日本絹人繊織物工業会 問合せ先 神奈川県 Tel045(210)5765 （社）神奈川県観光協会 Tel：045(681)0007 http://www.kanagawa-kankou.or.jp/silk-fair/part2/index.html
「第 59 回丹後織物求評会」	「丹後ちりめん」をはじめとする丹後の織物総合展示会を京都にて開催する。	平成 20 年 11 月 25 日(火)～27 日(木)	会場 京都市下京区の京都産業会館 主催 丹後織物工業組合 Tel:0772-68-5211

登録コーディネーター一覧

蚕糸・絹業提携支援緊急対策事業コーディネーター登録者一覧　　平成 20 年 5 月末現在

登録番号	氏　名	所属・役職名
19－001	島田　俊弘	中央蚕糸協会顧問
19－002	西　文秀	(社)日本絹業協会専務理事
19－003	中尾　敏明	(社)日本生糸問屋協会専務理事
19－004	道鎮　孝雄	(社)日本絹業協会事業部長
19－005	筧　文平	全国農業協同組合連合会副審査役
19－006	清水　重人	(財) 大日本蚕糸会蚕糸科学研究所上席研究員
19－007	田中　幸夫	(財) 大日本蚕糸会蚕業技術研究所上席研究員
19－008	代田　丈志	(財) 大日本蚕糸会蚕業技術研究所上席研究員
19－010	遠田　寿之	松岡株式会社監査役
19－011	渋谷　健治	松岡株式会社シルク事業部課長
19－012	佐藤　信行	松岡株式会社常務取締役
19－013	小板橋　広行	碓氷製糸農業協同組合参事
19－014	今村　幸文	碓氷製糸農業協同組合製造部長
19－015	萩原　和憲	碓氷製糸農業協同組合総務主任
19－016	宮坂　照彦	株式会社宮坂製糸所代表取締役
19－017	高橋　耕一	株式会社宮坂製糸所専務取締役
19－018	服部　芳和	有限会社織道楽塩野屋代表
19－019	木下　幸太郎	株式会社マルシバ代表取締役社長
19－021	門倉　重行	門倉メリヤス株式会社代表取締役
19－022	川瀬　久弥	樋口株式会社工場長
19－023	福永　吉穂	江一株式会社原糸事業部長
20－001	笹口　晴美	有限会社ミラノリブ代表取締役
20－002	薦田　智昌	ロード・ニジュウイチ株式会社代表取締役
20－003	西澤　厚男	中央蚕糸協会専務理事
20－004	佐藤　幸香	「香染」工房主宰
20－005	土井　芳文	絹小沢株式会社業務推進役
20－006	石田　克己	二十一世紀の絹を考える会世話人代表
20－007	深田　祥二	株式会社深田商店専務取締役
20－008	兵頭　眞通	愛媛蚕種株式会社代表取締役
20－009	草間　健一	株式会社草間商会代表取締役
20－010	前田　進	有限会社スリーエスプランニング代表取締役
20－011	星野　伸男	新増澤工業株式会社代表取締役
20－012	昆野　和夫	前いわい東農業協同組合養蚕農家指導担当
20－013	阿部　末男	岩手県養蚕活性化推進協議会代表
20－014	俵　武司	株式会社千總副部長
20－015	原田　尹文	有限会社ハラダ代表取締役
20－016	西尾　仁志	有限会社西尾呉服店代表取締役
20－017	山根　敏男	松村株式会社繊維原料部部門長
20－018	都木　裕一郎	ニッケン通商株式会社生糸販売担当責任者
20－019	伊藤　公一	株式会社伊と幸代表取締役社長
20－020	北川　幸	株式会社伊と幸取締役社長室長
20－021	本橋　伸夫	株式会社伊と幸取締役営業本部長
20－022	宮　忠光	株式会社伊と幸取締役副部長
20－024	野中　康雄	株式会社伊と幸和装部次長
20－025	亀井　修一	株式会社伊と幸営業部
20－026	宮沢　巳起代	有限会社塩野屋東京事務所スタッフ
20－027	東　宣江	群馬県　蚕糸館主宰
20－028	松澤　清典	松澤製糸所
20－029	渡邊　英夫	ネオシルク株式会社足利支店営業部長
20－030	金井　史郎	東北撚糸株式会社代表取締役社長
20－031	中谷　比佐子	株式会社秋櫻社代表取締役社長
20－032	北丸　豊	豊栄繊維株式会社代表取締役社長
20－033	松本　信孝	有限会社ハック代表取締役
20－035	片山　政明	山形県養蚕産地推進員
20－037	角谷　美和子	ハクビ京都きもの学院学院長
20－038	原田　晶三	アンファンテリブル代表
20－039	福田　隆	株式会社龍工房代表取締役
20－040	清水　武彦	有限会社シンセイ（信州繭ブランド織物振興会）会長
20－041	梅田　幸平	有限会社幸和代表取締役
20－042	大嶋　啓子	株式会社 AWA － S 取締役

(注)標記名簿は、公表を了承された方のみ掲載しております。

蚕糸関係博物館一覧

名　　称	〒	住　　所	電　話
蚕糸・織物関連の展示を目的としている施設			
ひころの里「シルク館」	986-0782	宮城県本吉郡南三陸町入谷字桜沢 442	0226-46-4310
米沢織物歴史資料館	992-0039	山形県米沢市門東町 1 丁目 1 － 87	0238-23-1325
かわまたおりもの展示館	960-1406	福島県伊達郡川俣町大字鶴沢字東 13 － 1	024-565-4889
群馬県立日本絹の里	370-3511	群馬県高崎市金古町 888 番地の 1	027-360-6300
前橋市蚕糸記念館	371-0036	群馬県前橋市敷島町 262 番地（敷島公園バラ園内）	027-231-9875
織物参考館 “紫”（ゆかり）	376-0034	群馬県桐生市東 4 丁目 2 番 24 号	0277-45-3111
片倉シルク記念館	360-0815	埼玉県熊谷市本石 2 丁目 135 番地	048-522-4316
きもの芸術館（(財）日本きもの文化協会）	150-0002	東京都渋谷区渋谷 1-6-8 清水学園ビル 6F ～ 8F	03-3400-0286
東京農工大学科学博物館	184-8588	東京都小金井市中町 2-24-16	042-388-7163
文化学園服飾博物館	151-8529	東京都渋谷区代々木 3-22-7	03-3299-2387
絹の道資料館	192-0375	東京都八王子市鑓水 989-2	0426-76-4064
シルク博物館	231-0023	神奈川県横浜市中区山下町 1 番地シルクセンター内	045-641-0841
絹糸紡績資料館	386-0498	長野県上田市上丸子 1078 シナノケンシ（株）内	0268-41-1800
岡谷蚕糸博物館	394-0028	長野県岡谷市本町 4 丁目 1 番 39 号	0266-22-5854
浦野染織資料博物館	393-0066	長野県諏訪郡下諏訪町曙町 5350	0266-27-8503
絹の資料館	386-0018	長野県上田市常田 1-10-3 笠原工業（株）内	0268-22-1230
駒ヶ根シルクミュージアム	399-4321	長野県駒ヶ根市東伊那 482 番地	0265-82-8381
キナーレきもの歴史館	948-0003	新潟県十日町市本町 6 十日町ステージ越後妻有交流館内	0257-52-0117
まゆの資料館	410-3612	静岡県賀茂郡松崎町宮内 263-2	0558-42-3912
川島織物文化館	601-1123	京都府京都市左京区静市市原町 265	075-741-4120
西陣織会館	602-8216	京都府京都市上京区堀川通り今出川南入	075-451-9231
織成館	602-8482	京都府京都市上京区浄福寺通上立売上る大黒町 693 番地	075-431-0020
グンゼ博物苑	623-0011	京都府綾部市青野町　グンゼ（株）周辺敷地内	0773-43-1050
上垣守国養蚕記念館	667-0311	兵庫県養父市大屋町蔵垣 246-2	0796-69-1580
西予市野村シルク博物館	797-1212	愛媛県西予市野村町野村 8 号 177 番地 1	0894-72-3710
蚕糸資料館	781-1301	高知県高岡郡越知町甲 1577 番地	0889-26-1002
展示の一部に蚕糸・織物関連がある施設			
三重中央農協郷土資料館	515-2504	三重県津市一志町高野 1204-1	059-293-0010
佐野市郷土博物館	327-0003	栃木県佐野市大橋町 2047	0283-22-5111
大間々町歴史民族館	376-0101	群馬県みどり市大間々町大間々 1030	0277-73-4123
羽村市郷土博物館	205-0012	東京都羽村市羽 741	042-558-2561
豊富村郷土資料館	400-1513	山梨県東八代郡豊冨村大鳥居 1619-1	055-269-3399
日本司法博物館（松本歴史の里）	390-0852	長野県松本市島立小柴 2196-1	0263-47-4515
長野県立歴史館	387-0007	長野県千曲市大字屋代字清水科野の里歴史公園内	026-274-2000
須坂市立博物館	382-0028	長野県須坂市臥竜 2 丁目 4 番 1 号臥竜公園内	026-245-0407
丸子町郷土博物館	386-0413	長野県上田市東内 2564-1	0268-42-2158
海野宿歴史民俗資料館	389-0518	長野県東御市本海野 1098	0268-64-1000
十日町市博物館	948-0072	新潟県十日町市西本町 1	0257-57-5531
美濃加茂市民ミュージアム	505-0004	岐阜県美濃加茂市蜂屋町上蜂屋 3299-1	0574-28-1110
その他関連施設			
原始布・古代織参考館	992-0039	山形県米沢市門東町 1 丁目 1 － 16	0238-22-8141
夕鶴の里資料館	992-0474	山形県南陽市漆山 2025-2	0238-47-5800
松ヶ丘開墾記念館	997-0152	山形県鶴岡市羽黒町松ヶ丘 29	0235-62-3985
結城紬関連施設（結城市伝統工芸館）	307-0001	茨城県結城市大字結城 3018-1	0296-32-7949
たくみの里木織の家「橡」（つるばみ）	379-1418	群馬県利根郡みなかみ町須川 784	0278-64-1308
調布市郷土博物館	182-0026	東京都調布市小島町 3-26-2	0424-81-7656
相模田名民家資料館	229-1124	神奈川県相模原市田名 4853 番 2（大杉公園隣り）	0427-61-7118
穂高町天蚕センター	399-8301	長野県南安曇郡穂高町大字有明 3618-4	0263-83-3835
上田市立博物館	386-0026	長野県上田市二の丸 3 番 3 号（上田城跡公園内）	0268-22-1274
塩沢つむぎ記念館（織の文化館）	949-6408	新潟県南魚沼市塩沢 1227-1	0257-82-4888
手織りの館（小千谷市総合産業会館内）	947-0028	新潟県小千谷市城内 1-8-25	0258-83-4800
白山工房（織りの資料館）	920-2501	石川県白山市白峰村ヌ 17	07619-8-2859
手おりの里金剛苑	529-1204	滋賀県愛知郡愛荘町蚊野外 514	0749-37-4131
織元田勇（田勇機業株式会社）	629-3104	京都府京丹後市網野町浅茂川 112	0772-72-0307
まゆ村	616-8384	京都府京都市右京区嵯峨天龍寺造路町	075-882-0564
シルク染め織り館	699-5216	島根県鹿足郡津和野町池村 1997-4	0856-74-0784
城川町天蚕センター	797-1703	愛媛県西予市城川町窪野 2579-2	0894-83-0640

統 計 資 料 目 次

<国内>

（1）蚕糸絹業の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46
（2）養蚕業の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47
（3）養蚕農家数の推移 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 48
（4）収繭量の推移 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 49
（5）都府県別養蚕農家数、桑使用面積、収繭量 ・・・・・・・・・・・・・・・ 50
（6）蚕品種別蚕種製造数量 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 51
（7）生糸需給状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 52
（8）生糸生産数量の推移 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 53
（9）生糸の繊度別生産数量の推移 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 54
（10）東京生糸標準値の推移 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 55
（11）絹需給の推移（生糸量換算試算） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 56
（12）製糸工場の原料繭需給 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 57
（13）器械製糸工場の操業状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 58
（14）生糸在庫数量の内訳 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 59
（15）蚕糸関係品目別輸入状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 60
（16）絹糸原産国別輸入状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 61
（17）織物の生産状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 62
（18）絹人繊織物製造業者の絹織物生産状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 63
（19）丹後、長浜、西陣の絹織物生産状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 64

<海外>

（1）世界主要国の家蚕繭生産数量 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 65
（2）世界主要国の家蚕生糸生産数量 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 65
（3）中国省別桑園面積、家蚕繭生産数量、生糸生産数量、製糸工場数 ・・・ 66
（4）中国省別家蚕繭生産数量の推移 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 67
（5）中国のシルク類（生糸、絹糸、絹織物）の輸出状況 ・・・・・・・・・・ 68
（6）ブラジルの繭、生糸の生産数量の推移 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 69
（7）ブラジルの生糸、絹糸及び副蚕糸の内需、輸出別販売状況 ・・・・・・ 70

蚕糸絹業の概要
Outline of Sericultural, Silk-Reeling, and Silk Fabric Industry in Japan

項目 item / 年次（暦年） Calendar year	養蚕業 Sericultural Industry			製糸業 Silk-Reeling Industry			絹業 Silk Fabric Industry	
	養蚕農家戸数 Number of Silk-Raising Farmer	収繭量 Cocoon Production	1戸当収繭量 Cocoon Production per Farmer	生糸生産量 Raw Silk Production	運転工場数 Number of Mills	稼働率 Operation ratio	絹人繊織機設備台数（保有台数） Number of Silk Loom	絹織物生産量 Silk Fabric Production
	戸 Number	トン t	kg	千俵 1,000 Bale of 60kg	工場 Number	%	千台 1,000	千㎡ 1,000 sq.meters
昭和50年 1975	248,400	91,219	367	333.9	123	87	311.3	156,494
55年 1980	165,590	73,061	441	267.6	105	81	279.2	143,708
60年 1985	99,710	47,274	474	158.6	67	87	212.5	107,499
平成３年 1991	44,010	20,821	473	91.4	50	75	161.7	76,089
４年 1992	34,880	15,553	446	84.1	49	75	148.8	72,901
５年 1993	27,180	11,212	412	70.3	45	72	138.1	66,801
６年 1994	19,040	7,724	406	64.5	39	69	102.7	61,653
７年 1995	13,640	5,350	392	53.4	29	63	94.2	54,131
８年 1996	7,890	3,021	383	42.7	26	58	84.7	53,815
９年 1997	6,310	2,516	399	31.5	18	67	81.6	52,031
10年 1998	5,070	1,980	390	18.4	13	76	74.5	38,673
11年 1999	4,030	1,496	371	10.8	8	73	67.4	33,425
12年 2000	3,280	1,244	379	9.3	8	67	62.9	32,275
13年 2001	2,730	1,031	378	7.2	8	63	56.7	29,801
14年 2002	2,360	880	373	6.5	7	68	51.2	26,826
15年 2003	2,070	780	377	4.8	6	64	48.7	23,935
16年 2004	1,850	683	369	4.4	5	62	45.5	21,895
17年 2005	1,591	626	393	2.5	2	62	43.7	19,816
18年 2006	1,345	505	375	2.0	2	83	41.7	18,507
19年 2007	1,169	433	370	1.8	2	83	40.0	15,482
前年対比(%) 2007/06	86.9	85.7	98.9	90.0	100.0	100.0	95.9	93.4

資料 ・養蚕業及び製糸業は農林水産省生産局特産振興課調査によるものである。
ただし、平成１３年以前の養蚕業は農林水産省統計部調査である。
・絹業は経済産業省調査によるものである。 平成１８年以降の絹織物生産量は、絹紡織物を含む。

（注）製糸業の運転工場数及び稼働率は器械製糸工場の操業状況である。

Source: The Regional Products and Industrial Crops Division, Agricultural Production Bureau, Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries (MAFF) (Sericultural and Silk-Reeling)
The Statistic Department, MAFF (Sericultural industry, before 2001)
The Ministry of Economy Trade and Industry (Silk Fabric)

Note: The number of operating mills and operation ratio are of machine reeling mills.

養蚕業の概要
Outline of Sericultural Industry

項目 Item / 年次 Year	養蚕農家数 Farm households raising silk-worm	桑栽培面積 Growing area of mulberry	桑使用面積 Harvested area of mulberry	蚕種掃立卵量 Silk-worm eggs used	1箱当り収繭量 Cocoon production per box of silk-worm eggs used	収繭量 Cocoon production	1戸当り栽培面積 Growing area of mulberry per farm household raising silk-worm	1戸当り掃立卵量 Box of silk-worm eggs used per farm household raising silk-worm	1戸当り収繭量 Cocoon production per farm household raising silk-worm
	戸 number	100ha	100ha	1000箱 1,000cases	kg	t	a	箱 box	kg
1993	27,200	425	239	319	35	11,212	156	12	412
1994	19,000	339	173	228	34	7,724	178	12	406
1995	13,600	263	117	155	35	5,350	193	11	392
1996	7,890	193	66	87	35	3,021	244	11	382
1997	6,310	138	54	74	34	2,516	219	12	399
1998	5,070	103	44	60	33	1,980	203	12	390
1999	4,030	74	33	45	33	1,496	184	11	371
2000	3,280	59	27	37	33	1,244	179	11	379
2001	2,730	48	23	31	34	1,031	174	11	378
2002	2,360	43	22	26	34	880	182	11	373
2003	2,070	38	19	23	33	780	185	11	374
2004	1,850	34	18	21	38	683	186	11	369
2005	1,591	30	16	18	34	626	188	12	396
2006	1,345	27	14	15	34	505	198	11	375
2007	1,169	24	12	13	35	433	202	11	371
対前年比 2007/06(%)	86.9	88.9	85.7	87.2	103.6	85.7	102.0	100.0	98.9

資　料：農林水産省統計情報部調査（～2001年）、農林水産省生産局調査（2002年～）。
Source　：The Statistics and Information Department, Ministry of Agriculture, Foreatry and Fisherises (～2001).
The Agricultural Production Bureau, Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries (2002～).

養蚕農家数

Farm households raising silk-worm

（単位：戸）
(Unit : number)

項目 Item / 年次 Year	年間 Annual total	春蚕 Spring silk-worm	初秋蚕 Early autumn silk-worm	晩秋蚕 Late autumn silk-worm
1993	27,180	24,160	17,450	20,740
1994	19,040	16,790	13,190	14,790
1995	13,640	12,450	9,560	9,580
1996	7,890	6,980	5,000	6,290
1997	6,310	5,650	4,420	5,120
1998	5,070	4,550	3,750	4,120
1999	4,030	3,600	2,710	3,280
2000	3,280	2,970	2,170	2,700
2001	2,730	2,410	1,870	2,270
2002	2,360	1,992	1,720	1,918
2003	2,070	1,875	1,503	1,751
2004	1,850	1,621	1,371	1,551
2005	1,591	1,420	1,061	1,345
2006	1,345	1,215	852	1,102
2007	1,169	1,052	726	988
対前年比 2007/06(%)	86.9	86.6	85.2	89.7

資　料：農林水産省統計情報部調査（～2001年）、全国農業協同組合連合会調査（2002年～2004年、参考数値）、
農林水産省生産局調査（2005年～）。

Source ：The Statistics and Information Department,Ministry of Agriculture,Foreatry and Fisherises(～2001).
National Federation of Agricultural Co-operative Associations (2002～2004).
The Agricultural Production Bureau,Ministry of Agriculture,Forestry and Fisheries (2005～).

収繭量
Cocoon Production

項目 Item / 年次 Year	年計 Annual total				1戸当り収繭量 Cocoon production per farm household raising silk-worm				桑使用面積10a当たり収繭量（年間） Cocoon production per farm harvested area of mulberry
	年間 Annual total	春蚕 Spring silk-worm	初秋蚕 early autumn silk-worm	晩秋蚕 Late autumn silk-worm	年間 Annual total	春蚕 Spring silk-worm	初秋蚕 early autumn silk-worm	晩秋蚕 Late autumn silk-worm	
	t	t	t	t	kg	kg	kg	kg	kg/10a
1993	11,212	4,624	3,060	3,529	412	191	175	170	47
1994	7,724	3,036	2,044	2,644	406	181	155	170	46
1995	5,350	2,222	1,477	1,651	392	178	155	172	46
1996	3,021	1,184	747	1,090	382	170	149	173	46
1997	2,516	982	678	857	398	174	153	167	46
1998	1,980	769	588	623	390	169	157	151	45
1999	1,496	596	391	509	371	166	144	155	46
2000	1,244	500	320	424	379	169	148	157	47
2001	1,031	391	275	365	378	162	147	161	47
2002	880	330	231	320	373	166	134	167	40
2003	775	313	210	253	374	167	140	144	40
2004	675	256	176	243	369	158	128	157	38
2005	626	243	165	218	396	171	156	162	40
2006	505	209	122	173	375	172	143	157	36
2007	433	175	110	148	371	166	152	150	37
対前年比 2007/06(%)	85.7	83.7	90.2	85.5	98.9	96.5	106.3	95.5	102.8
構成比(%)	100.0	40.4	25.4	34.2					

資　　料：農林水産省統計情報部調査（～2001年）、全国農業協同組合連合会調査（2002年～2004年，参考数値）、
農林水産省生産局調査（2005年～）。

Source　：The Statistics and Information Department,Ministry of Agriculture,Foreatry and Fisherises(～2001).
National Federation of Agricultural Co-operative Associations (2002～2004).
The Agricultural Production Bureau,Ministry of Agriculture,Forestry and Fisheries (2005～).

都府県別養蚕農家数・桑使用面積・収繭量（2007年）

Farm households rising silk-worm, Harvested area of mulberry and Cocoon production by prefectures in 2007

項目 Item / 県別 Each Prefecture	年計 Annual total			春繭 spring silk-worm		初秋繭 Early autumn silk-worm		晩秋繭 late autumn silk-worm	
	養蚕農家数 Farm households rising silk-worm	桑使用面積 Harvested area of mulberry	収繭量 Cocoon production	養蚕農家数 Farm households rising silk-worm	収繭量 Cocoon production	養蚕農家数 Farm households rising silk-worm	収繭量 Cocoon production	養蚕農家数 Farm households rising silk-worm	収繭量 Cocoon production
	number	ha	t	number	t	number	t	number	t
岩手 Iwate	34	32	11.8	24	2.9	34	4.5	34	4.3
宮城 Miyagi	41	42	12.7	28	4.5	27	4.1	32	4.2
山形 Yamagata	19	26	7.6	13	3.1	13	1.6	17	2.8
福島 Fukushima	114	179	56.6	98	19.5	85	16.4	100	20.7
茨城 Ibaragi	43	45	17.9	41	7.6	34	4.6	36	5.6
栃木 Tochigi	53	100	40.2	52	15.6	34	8.1	49	16.5
群馬 Gunma	471	515	185.6	439	78.0	275	46.9	429	60.7
埼玉 Saitama	114	92	38.0	109	15.5	81	9.7	97	12.8
千葉 Chiba	19	9	4.2	18	1.8	8	1.1	12	1.2
神奈川 Kanagawa	14	‥	3.0	11	1.1	10	0.6	14	1.2
山梨 Yamanashi	43	28	13.3	36	6.4	15	2.4	33	4.5
長野 Nagano	54	34	15.9	48	6.3	42	4.4	39	5.3
岐阜 Gifu	38	15	5.3	30	2.6	14	0.8	25	2.0
徳島 Tokushima	31	12	6.0	29	2.9	17	1.3	21	1.8
愛媛 Ehime	22	20	8.1	22	3.0	18	2.6	18	2.5
熊本 Kumamoto	15	7	2.1	14	1.4	9	0.4	8	0.3
その他 Others	44	16	1.9	40	2.8	10	0.5	24	1.7
全国計 Total	1,169	1,172	433.2	1,052	175.0	726	110.0	988	148.1

資　料：農林水産省生産局調査。

Source　: The Agricultural Production Bureau, Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries.

蚕品種別蚕種製造数量（2007年）
Production by Sort of Silk-worm Eggs

	2006年夏秋蚕用 for summer & autumn reeling		2007春蚕用 for spring reeling		2007夏秋蚕用 for summer & autumn reeling		合計 Total	
	箱 box	割合 rate	箱 box	割合 rate	箱 box	割合 rate	箱 box	割合 rate
錦秋×鐘和	3,280	40.3	1,770	22.1	2,400	40.1	7,450	33.6
錦秋1号×鐘和1号	2,900	35.6			2,600	43.5	5,500	24.8
春嶺×鐘月			1,200	15.0			1,200	5.4
春嶺1号×鐘月1号			2,600	32.4			2,600	11.7
ぐんま×２００	1,395	17.1	1,832	22.8	480	8.0	3,707	16.7
朝・日×つくば・ね			100	1.2	500	8.4	600	2.7
世・紀×二・一	86	1.1	67	0.8			153	0.7
芙蓉×つくば・ね	100	1.2					100	0.5
鐘光×黄玉								
ぐんま黄金	16	0.2	38	0.5			54	0.2
新青白			38	0.5			38	0.2
新小石丸	283	3.5	222	2.8			505	2.3
小石丸	3	0.0	18	0.2			21	0.1
かいりょう×あけぼの								
改良しんあけぼの								
蚕太			22	0.3			22	0.1
上州絹星	77	0.9	118	1.5			195	0.9
合計 Total	8,140	36.8	8,025	36.2	5,980	27.0	22,145	100.0

資　料：農林水産省生産局調査。
Source　: The Agricultural Production Bureau, Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries.

生糸需給状況
Raw Silk Supply and Demand Balance

項目 Item / 年月 Year & Month	生糸 Raw Silk					絹糸 Silk Yarn		絹織物 Silk Fabrics	
	生産数量 Production (A)	輸入数量 Imports (B)	輸出数量 Exports (C)	国内引渡数量 Domestic Deliveries (D)	期末在庫数量 Ending Stocks (E)	輸入数量 Imports (F)	輸出数量 Exports (G)	輸入数量 Imports (H)	輸出数量 Exports (I)
暦年 Calendar Year	俵 Bales of 60kg	俵 Bales of 60kg	俵 Bales of 60kg	俵 Bales of 60kg	俵 Bales of 60kg	俵 Bales of 60kg	俵 Bales of 60kg	1000SM	1000SM
2002	6,521	31,702	—	37,265	25,955	28,089	124	12,248	6,843
2003	4,791	30,827	1,510	34,166	25,897	33,044	183	12,544	7,111
2004	4,387	26,008	12,500	29,585	14,207	29,774	331	13,127	7,274
2005	2,508	22,017	4,125	26,429	8,178	32,700	609	15,999	8,252
2006	1,956	19,974	—	20,752	9,356	31,524	568	12,964	7,578
2007	1,747	12,601	—	15,624	7,879	19,439	404	11,355	7,184
生糸年度 Silk Year									
2002	5,953	30,510	—	35,462	26,794	28,150	154	11,747	6,986
2003	4,517	30,411	6,635	33,333	21,754	33,261	182	13,036	7,206
2004	3,868	20,154	11,500	27,002	7,274	30,204	565	14,130	7,286
2005	2,024	26,365	—	25,737	9,926	36,113	500	16,121	8,655
2006	1,794	13,394	—	16,873	8,241	21,561	534	10,730	7,152
2007 - 2	141	1,084	—	1,398	8,899	997	33	780	561
3	159	725	—	1,090	8,693	936	44	622	701
4	155	851	—	1,219	8,480	1,317	34	933	633
5	138	872	—	1,249	8,241	1,667	21	1,024	574
6	147	1,241	—	1,558	8,071	1,711	38	969	626
7	146	861	—	1,129	7,949	1,872	12	962	555
8	136	1,277	—	1,169	8,193	1,774	31	975	567
9	151	1,262	—	1,569	8,037	1,935	55	987	563
10	153	1,438	—	1,397	8,231	2,222	57	1,011	604
11	150	1,357	—	1,320	8,422	1,989	42	1,121	586
12	146	885	—	1,369	8,080	1,667	21	1,125	721
1	130	918	—	1,249	7,879	2,021	10	1,295	416
2	135	787	—	1,487	7,314	1,769	12	770	670
3	153	1,459	—	1,415	7,511	1,689	16	865	685
2008.1～3	418	3,164	—	4,151	7,511	5,479	38	2,930	644
2007.1～3	425	2,557	—	3,645	8,693	3,286	94	2,248	1,754
2007.6～3	1,450	11,485	—	13,661	7,511	18,649	294	10,080	4,866
2006.6～3	1,501	11,671	—	14,405	8,693	18,577	479	8,774	5,944

資　料：(A)(C)(D)(E)農林水産省生産局調査。(B)財務省関税局調査、ただし96年1月以降の輸入は、農畜産業振興機構調査の実需者輸入分と一般者輸入分を合わせた数値。(F)(G)(H)(I)財務省関税局調査。

備　考：1.国内引渡数量(D)=｛前月在庫数量+(A)+(B)｝-｛(C)+(E)｝。
2.kgを60kg俵に換算しているので、各月の計と合計とが一致しない場合がある。

Source　：(A)(C)(D)(E)The Agricultural Production Bureau, Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries.
(B)The Customs Bureau, Ministry of Finance. But the figures for law silk imports have been based on date of the Agriculture & Livestock Industries Corporation since Jan. 1996, excluding bonded silk. (F)(G)(H)(I)The Customs Bureau, Ministry of Finance.

Remarks：1. Domestic deliveries(D)={Stock at end of the previous month+(A)+(B)}-{(C)+(E)}.
2. Monthly volume may not add up the total volume due to round off.

生糸生産数量の推移

Production of Raw Silk

（単位：60kg俵）
(Unit : Bales of 60kg)

項目 Item / 年月 Year & Month	生糸及び玉糸 Raw Silk and Doupion Silk				
	計 Total	器械製糸 Machine Reeling Mills	国用製糸 及び Domestic Raw Silk & Reelers	器械玉糸 Machine Reeling Mills	繭品質評価機関 Cocoon Quality Grading Stations
暦年 Calendar Year					
2002	6,521	5,617	904		・・
2003	4,791	4,000	791		・・
2004	4,387	3,634	753		・・
2005	2,508	1,735	773		・・
2006	1,956	1,417	539		・・
2007	1,747	1,227	520		・・
生糸年度 Silk Year					
2002	5,953	5,128	825		・・
2003	4,517	3,735	782		・・
2004	3,868	3,110	758		・・
2005	2,024	1,329	695		・・
2006	1,794	1,285	509		・・
2007 － 2	141	100	41		・・
3	159	113	46		・・
4	155	113	42		・・
5	138	97	41		・・
6	147	104	43		・・
7	146	101	45		・・
8	136	94	42		・・
9	151	108	43		・・
10	153	105	48		・・
11	150	103	47		・・
12	146	102	44		・・
2008 － 1	130	91	39		・・
2	135	91	44		・・
3	153	105	48		・・
2008.1～3	418	287	131		・・
2007.1～3	425	300	125		・・
2007.6～3	1,447	1,004	443		・・
2006.6～3	1,663	1,056	607		・・

資　　料：農林水産省生産局調査。
備　　考：1.生糸年度は6月から翌年5月までである。
　　2.kgを60kg俵に換算しているので、各月の計と合計とが一致しない場合がある。
Source　：The Agricultural Production Bureau,Ministry of Agriculture,Forestry and Fisheries.
Remarks　：1.Silk year ranges from June to May of the following year.
　　2.Monthly volume may not add up the total volume due to round off.

生糸の繊度別生産数量の推移

Raw Silk Production by Sizes

(単位：60kg俵)
(Unit : Bales of 60kg)

項目 Item / 年月 Year & Month	生糸 Raw Silk					
	計 Total	18Denier以下 or finer 17/19	21Denier 20/22	27Denier 26/28	31Denier 30/32	その他 Others
暦年 Calendar Year						
2002	6,521	3	429	3,178	1,937	975
2003	4,791	13	343	2,865	1,038	533
2004	4,387	2	471	2,389	948	581
2005	2,508	8	337	834	799	527
2006	1,956	4	240	531	653	523
2007	1,747	5	259	495	514	474
生糸年度 Silk Year						
2002	5,953	8	316	3,273	1,649	706
2003	4,517	7	334	2,689	955	530
2004	3,868	4	482	1,845	918	622
2005	2,024	6	261	510	726	518
2006	1,794	4	269	480	562	475
2007 — 2	141	—	26	39	42	34
3	159	—	18	40	39	61
4	155	—	21	51	44	39
5	138	—	21	31	43	43
6	147	—	11	43	43	49
7	146	—	39	36	36	34
8	136	—	26	41	45	23
9	151	—	14	54	39	45
10	153	—	14	55	60	24
11	150	—	29	36	36	48
12	146	1	13	38	42	52
2008 — 1	130	—	14	26	40	50
2	135	4	31	10	33	57
3	153	—	29	29	47	46
2008.1～3	418	4	74	65	120	153
2007.1～3	425	—	71	110	126	117
2007.6～3	1,447	5	220	368	421	428
2006.6～3	1,501	4	227	398	475	393

資　　料：農林水産省生産局調査。
備　　考：kgを60kg俵に換算しているので、各月の計と合計とが一致しない場合がある。
Source　：The Agricultural Production Bureau, Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries.
Remarks　：Monthly volume may not add up the total volume due to round off.

東京生糸標準値の推移
Standard Price of Raw Silk

（単位：円/Kg）
(Unit: JPY/Kg)

区分 / 区分	東京市場 Tokyo Exchange Market		
	最高 High	最低 Low	平均 Average
平成19年10月 Oct 2007	3,460	3,020	3,411
平成19年11月 Nov 2007	3,200	2,950	3,108
平成19年12月 Dec 2007	3,070	3,070	3,070
平成20年1月 Jan 2008	3,080	3,070	3,072
平成20年2月 Feb 2008	3,080	3,050	3,077
平成20年3月 Mar 2008	3,200	3,080	3,094
平成20年4月 Apr 2008	3,250	3,220	3,223
平成20年5月 May 2008	3,320	3,260	3,266

資料：（社）日本生糸問屋協会発表
Source: Japan Raw Silk Dealer's Association

（参考）(Reference)
生糸現物相場の推移
Spot Price of Raw Silk

（単位：円/Kg）
(Unit: JPY/Kg)

区分 / 暦年	横浜市場 Yokohama Exchange Market			関西市場 Kansai Exchange Market		
	最高 High	最低 Low	平均 Average	最高 High	最低 Low	平均 Average
７年 1995	7,190	5,150	6,547	7,190	5,160	6,551
８年 1996	8,710	5,760	7,321	8,200	5,420	7,293
９年 1997	6,450	4,070	4,919	6,600	4,040	4,909
10年 1998	5,000	3,050	4,022	4,850	3,080	4,011
11年 1999	3,670	2,870	3,312	3,670	2,840	3,291
12年 2000	6,000	2,740	3,565	5,955	2,735	3,548
13年 2001	4,480	2,280	3,077	4,485	2,290	3,016
14年 2002	6,800	1,710	3,053	5,980	1,670	2,849
15年 2003	3,300	1,650	2,283	3,230	1,700	2,273
16年 2003	2,930	2,150	2,512	2,895	1,995	2,487
17年 2005	4,160	2,020	2,764	2,660	2,510	2,637
平成18年1月 Jan 2006	4,220	3,940	4,037	2,660	2,660	2,660
平成18年2月 Feb 2006	5,000	4,340	4,733	2,660	2,660	2,660
平成18年3月 Mar 2006	4,710	4,280	4,562	2,660	2,660	2,660

資料：横浜生糸問屋協会及び神戸シルクアソシエイツ調査
Source: The Yokohama Raw Silk Dealer's Association
Kobe Silk Associates

絹需給の推移（生糸換算試算）

Silk Supply and Demand Balance (Raw Silk Value Estimation)

（単位：千俵）
(Unit : 1,000Bales of 60kg)

項目 Item / 暦年 Calendar Year	供給計 Supply Total ①								需要計 Demand Total ②=①-④							期末在庫 Ending Stocks ④
		期初在庫 Opening Stocks	生産 Production	輸入 Import						輸出 Export					内需 Domestic Demand ②-③	
				計 Total	生糸 Raw Silk	絹糸 Silk Yarn	織物 Fabrics	二次 The Second		計 ③ Total	生糸 Raw Silk	絹糸 Silk Yarn	織物 Fabrics	二次 The Second		
1990	462	164	95	203	35	16	59	93	290	13	—	0	9	4	277	172
1991	494	172	92	230	46	29	62	93	327	11	0	0	7	4	316	167
1992	460	167	85	208	26	21	60	101	308	11	—	0	7	4	297	152
1993	483	152	71	260	25	38	65	132	345	11	—	0	7	4	334	138
1994	525	138	65	322	26	37	64	195	390	10	—	0	7	3	380	135
1995	515	135	54	326	30	31	61	204	377	11	0	1	8	2	366	138
1996	507	138	43	326	35	49	62	180	374	13	0	0	9	4	361	133
1997	401	133	32	236	34	35	43	124	270	14	0	0	11	3	256	131
1998	345	131	18	196	28	23	28	117	222	13	0	0	11	2	209	123
1999	361	123	11	227	41	28	31	127	242	13	0	0	11	2	229	119
2000	376	119	9	248	39	32	28	149	263	16	0	0	14	2	247	113
2001	350	113	7	230	30	23	25	152	237	17	0	0	15	2	220	113
2002	366	113	7	246	32	28	24	162	261	18	0	0	16	2	243	105
2003	361	105	5	251	31	33	25	162	261	20	2	0	17	1	241	100
2004	353	100	4	249	26	30	25	168	268	30	11	0	18	1	238	85
2005	354	85	3	266	22	33	30	181	270	27	4	1	21	1	243	84
2006	334	84	2	248	20	32	24	172	257	22	0	1	20	1	235	77
対前年比 2006/05 (%)	94.4	98.8	66.7	93.2	90.9	97.0	80.0	95.0	95.2	81.5	—	100.0	95.2	100.0	96.7	91.7

資　料：蚕糸業需給・価格動向隔月報・繊維統計月報・日本貿易月報より、農林水産省特産振興課がとりまとめたものである。
ただし、2000年以降は農林水産省特産振興課の協力により、日本生糸問屋協会が試算推計したものである。

Source : "Silk balance and price situation monthly","Trade Statistics"(arranged by the Regional Products and Industrial Crops Division,Agricultural Bureau,MAFF)
After 2000,estimated by Raw Silk Dealer's Association through colaboration with the Regional Products and Industrial Crops Division.

製糸工場の原料繭需給

Balance of Cocoons as Raw Materials by Reeling Mills

（単位：生繭．t）
(Unit : Ton by fresh weight)

項目 Item / 年月 Year & Month	総計 Grand Total			うち器械製糸工場 Machine Reeling Mills		
	受入数量 Receipts	消費数量 Put in Process	期末在庫数量 Ending Stocks	受入数量 Receipts	消費数量 Put in Process	期末在庫数量 Ending Stocks
暦年 Calendar Year						
2002	1,559	2,150	775	1,366	1,822	708
2003	1,598	1,612	761	1,302	1,330	679
2004	1,291	1,500	553	1,039	1,228	489
2005	866	830	589	540	552	478
2006	600	646	541	405	445	436
2007	548	581	505	345	390	391
生糸年度 Silk Year						
2002	1,921	1,972	525	1,764	1,674	480
2003	1,477	1,554	448	1,162	1,273	368
2004	1,056	1,280	224	794	1,008	154
2005	839	673	390	531	419	266
2006	562	599	349	405	410	260
2007 — 2	-8	47	442	-8	32	367
3	13	52	402	-1	35	330
4	0	50	351	0	35	295
5	46	48	349	-2	33	260
6	16	50	316	11	34	238
7	131	49	398	130	32	335
8	110	44	464	61	29	368
9	35	50	448	33	34	366
10	135	50	533	120	32	454
11	3	50	486	3	33	424
12	68	48	505	-1	32	391
2008 — 1	-1	43	461	-1	29	361
2	-2	44	416	-2	28	332
3	-8	52	356	-9	34	288
2008.1～3	-11	139	356	-12	91	288
2007.1～3	4	142	402	-10	96	330
2007.6～3	487	480	356	345	317	288
2006.6～3	516	501	402	407	342	330

資　料：農林水産省生産局調査。

備　考：1. 本表は上繭及び玉屑繭の合計である。
2. 総計は器械製糸、国用製糸、繭品質評価機関及び玉糸製糸の合計である。なお国用製糸及び玉糸製糸は乾繭重量調査のため、乾繭歩合42%にて生繭重量に換算した。
3. 受入数量=本月末在庫数量+消費数量-前月末在庫数量。

Source : The Agricultural Production Bureau, Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries.

Remarks : 1. This table includes reelable, doupion and waste cocoons.
2. The grand total includes the material cocoons at the machine-reeling mills, reelers of raw silk for domestic use, cocoon quality appraisal stations and doupion silk producers.
In addition, reelers of raw silk for domestic use and doupion silk producers reported in dry cocoon weight, which was converted into fresh by dividing by 42%.
3. Receipts=(Ending stocks of the current month)+(put in process)-(Ending stocks of the preceding month).

器械製糸工場の操業状況
Activities of Machine Reeling Mills

項目 Item / 年月 Year & Month	運転工場数 Operating Reeling Mills	設備数 Reeling Machines		運転率 (%)	操業日数 Days Operated	従業者数 Number of Workers
		運転可能 Operable	運転 Operating	Operating Ratio		
暦年 Calendar Year						
2002	7	607	414	68	290	207
2003	6	444	285	64	290	173
2004	5	426	262	62	292	165
2005	2	203	126	62	269	83
2006	2	114	94	82	266	59
2007	2	112	93	83	266	57
2007 — 2	2	112	93	83	21	60
3	2	112	94	84	23	60
4	2	112	93	83	23	56
5	2	112	94	84	22	55
6	2	112	92	82	23	55
7	2	112	89	79	23	55
8	2	112	92	82	21	55
9	2	112	89	79	22	56
10	2	112	92	82	24	60
11	2	112	96	86	22	58
12	2	112	94	84	22	57
2008 — 1	2	112	95	85	20	58
2	2	112	94	84	22	57
3	2	112	96	86	22	58

資　料：農林水産省生産局調査。
備　考：1. 設備数中の運転可能及び運転台数は毎月の算術平均である。
2. 運転率は運転可能台数に対する運転台数の比率である。
3. 従業者数は期末現在の在籍従業員数である。

Source : The Agricultural Production Bureau, Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries.
Remarks : 1. The number of operable and operating reeling machines is arithmetic means of monthly figures.
2. Operating ratio means ratio of operating machines in operable machines.
3. Number of workers are those on payroll as of end of period.

生糸在庫数量の内訳

Breakdown of Raw Silk Stocks

(単位：60kg俵)
(Unit : Bales of 60kg)

項目 Item / 年月 Year & Month	総計 Grand Total	一般在庫 Stock in markets					農畜産業振興機構 Stock of Agriculture & Livestock Industries Corporation		
		計 Total	製糸工場 Filatures Mills	生糸市場売買業者 Dealers	生糸市場外売買業者 Domestic Dealers	生糸輸出入業者 Ex and Importers	受入数量 Accepts	引渡数量 Deliveries	在庫数量 Ending Stocks
暦年 Calendar Year									
2002	25,955	5,932	1,358	605	3,772	197	31,702	31,809	20,023
2003	25,897	8,001	1,663	235	5,784	319	30,827	32,954	17,896
2004	14,207	10,082	2,055	183	7,360	484	26,008	39,779	4,125
2005	8,178	8,178	721	139	7,008	310	22,017	26,142	—
2006	9,356	9,356	446	50	8,606	254	19,974	19,974	—
2007	8,080	8,080	359	20	7,358	343	12,601	12,601	—
生糸年度 Silk Year									
2002	26,794	6,771	1,837	445	4,207	282	30,510	30,617	20,023
2003	21,754	9,163	1,842	560	6,516	245	30,411	37,843	12,591
2004	7,274	7,274	1,636	50	5,170	418	20,154	32,745	—
2005	9,926	9,926	373	170	8,923	460	26,365	26,365	—
2006	8,241	8,241	473	20	7,564	184	13,394	13,394	—
2007 — 2	8,899	8,899	446	15	8,219	219	1,084	1,084	—
3	8,693	8,693	498	15	7,971	209	725	725	—
4	8,480	8,480	524	20	7,733	203	851	851	—
5	8,241	8,241	473	20	7,564	184	872	872	—
6	8,071	8,071	472	20	7,453	126	1,241	1,241	—
7	7,949	7,949	451	15	7,240	243	861	861	—
8	8,193	8,193	436	30	7,382	345	1,277	1,277	—
9	8,037	8,037	415	10	7,243	369	1,262	1,262	—
10	8,231	8,231	383	15	7,501	332	1,438	1,438	—
11	8,418	8,418	366	15	7,724	313	1,357	1,357	—
12	8,080	8,080	359	20	7,358	343	885	885	—
2008 — 1	7,879	7,879	350	15	7,193	321	918	918	—
2	7,314	7,314	327	10	6,607	370	787	787	—
3	7,511	7,511	321	15	6,774	401	1,459	1,459	—

資　　料：農林水産省生産局調査。
備　　考：製糸工場は器械製糸、国用製糸、繭品質評価機関及び玉糸製糸の合計である。
Source　：The Agricultural Production Bureau, Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries.
Remarks　：Figures for filatures are the sum total of the closing stocks in machine-reeling filatures, reelers of raw silk for domestic use, cocoon quality appraisal stations and doupion reelers.

蚕糸関係品目別輸入状況（平成15年～20年1月）
Breakdown of Silk-Related Products Imports (2003～Jan 2008)

	単位 Unit	平成20年(2008) (1月) Jan	平成20年(2008) (累計) Accumulated Total	平成19年 (2007)	平成18年 (2006)	平成17年 (2005)	平成16年 (2004)	平成15年 (2003)	20年/19年 2007/06 (%)
計 Total	金額 1,000 yen	1,464,242	1,464,242	16,635,290	25,082,685	21,126,873	18,580,471	18,742,108	8.8
生糸・玉糸計 Raw Silk and Doupion Silk	俵 Bales of 60kg	1,041.4	1,041.4	12,857.9	21,147.8	22,915.1	25,418.8	31,379.9	8.1
絹糸 Silk Yarn	俵 Bales of 60kg	2,021.4	2,021.4	19,439.2	31,524.4	32,699.5	29,744.5	33,043.6	10.4
野蚕糸 Wild Raw Silk	俵 Bales of 60kg	100.4	100.4	333.4	429.9	520.0	933.6	1,109.1	30.1
繭 Cocoon	kg	0	0	13,750	18,565	16,300	203,604	258,285	0.0
真綿 Floss Silk	kg	0	0	0	34,176	45,186	25,320	55,969	－
ペニー Peigne	kg	0	0	0	19,760	15,068	14,952	7,308	－
くず繭 Waste Cocoon	kg	0	0	0	1,020	3,650	6,797	3,540	－
絹ノイル Silk Noil	kg	0	0	0	234,894	216,422	293,373	231,277	－
その他の絹くず Other Silk Waste	kg	0	0	0	255,951	319,072	267,341	346,689	－
絹のくず計 Silk Waste Total	kg	0	0	0	545,801	878,398	607,783	584,783	－
絹紡糸 Spun silk yarn from silk waste other than noil	kg	48,333	48,333	608,110	756,065	847,200	781,454	832,514	7.9
絹紡紬糸 Spun silk yarn from noil silk	kg	16,535	16,535	117,265	208,913	202,901	244,557	260,508	14.1
絹糸・絹紡糸・絹紡紬糸（小売用） Silk Yarn for Retail	kg	0	0	1,778	1,107	997	1,989	501	0.0
ﾒﾘﾔｽ編物及びｸﾛｾ編物（その他） Knitted and Crocheted Fabrics (Others)	kg	2,458	2,458	20,425	16,040	19,221	20,505	11,972	12.0
絹織物 Silk Fabrics	㎡	1,199,548	1,199,548	10,381,266	11,859,929	14,782,915	10,823,074	10,373,703	11.6
うちしぼり Tie-Dyeing of Silk Fabrics	㎡	6,193	6,193	92,270	165,427	290,322	260,496	246,347	6.7

注：金額＝CIF千円

資料：財務省関税局

Source:The Customs Bureau, Ministry of Finance

絹糸の輸入数量

Silk Yarn Imports

（単位：60kg俵）
(Unit : Bales of 60kg)

国名 Country / 年月 Year & Month	計 Total	韓国 S Korea	中国 China	ベトナム Vietnam	イタリア Italy	アメリカ USA	ブラジル Brazil	その他 Others
暦年 Calendar Year								
2005	32,700	292	18,977	7,550	7	—	5,867	6
2006	31,524	94	17,019	8,706	27	—	5,675	3
2007	19,439	21	11,726	4,743	12	1	2,930	7
生糸年度 Silk Year								
2005	36,113	143	21,337	8,983	18	—	5,621	8
2006	21,561	78	11,212	5,735	18	1	4,518	3
2007 — 2	997	—	634	245	2	—	116	—
3	936	—	512	167	—	1	256	—
4	1,317	21	783	398	1	—	116	—
5	1,667	—	1,119	267	0	—	280	—
6	1,711	—	1,134	409	4	—	164	—
7	1,872	—	1,153	487	1	—	231	—
8	1,774	—	1,154	466	1	—	154	0
9	1,935	—	1,239	520	—	—	176	—
10	2,222	—	1,224	638	1	—	358	—
11	1,989	—	1,136	567	2	—	281	4
12	1,667	—	930	371	0.4	—	365	—
2008 — 1	2,021	—	1,236	447	0	—	338	0
2	1,769	—	853	746	0	—	170	0
3	1,689	7	871	418	1.0	—	390	2
2008.1～3	5,479	7	2,960	1,611	1	—	898	2
2007.1～3	3,286	—	1,854	621	2	1	804	3

資　　料：財務省関税局調査。
備　　考：kgを60kg俵単位に換算してあるので、国別の計と合計が一致しない場合がある。
Source　：The Customs Bureau, Ministry of Finance.
Remarks　：Country volume may not add up the total volume due to round off.

織物の生産数量
Fabric Production

(単位：1,000㎡)
(Unit：1,000sq.meters.)

項目 / 年月 Item / Year& Month	計 Total	綿織物 Cotton Fabrics	絹織物 Silk Fabrics	絹紡織物 Spun Silk Fabrics	合成繊維織物 Synthetic Fiber Fabrics	人絹織物 Rayon Filament and Acetate Fabrics	ビスコースフ織物 Viscose staple fabrics	毛織物 Wool Fabrics	麻織物 Bast Fiber Fabrics
暦年 Calendar Year									
2002	2,162,818	539,764	26,824	1,054	1,292,617	69,544	141,816	88,114	3,085
2003	2,031,053	506,696	23,940	728	1,217,413	71,711	129,178	78,071	3,318
2004	1,974,731	479,246	21,970	753	1,209,640	67,540	116,294	75,662	3,326
2005	1,837,703	425,460	19,816	579	1,146,845	66,231	101,235	72,531	5,006
2006	1,739,863	399,776	17,125	1,381	1,085,577	64,475	95,921	71,007	4,600
2007	1,699,291	367,733	14,262	1,204	1,096,107	63,714	85,308	67,590	3,372
2007 — 2	142,640	32,550	1,238	96	89,908	5,223	8,030	5,356	240
3	146,310	32,627	1,251	96	92,850	5,408	8,091	5,476	510
4	143,211	31,386	1,241	95	91,268	5,240	7,960	5,640	382
5	139,291	31,264	1,150	95	89,177	5,183	6,262	5,912	247
6	143,181	31,427	1,275	98	91,959	5,338	6,963	5,922	200
7	145,873	31,229	1,200	97	94,825	5,438	6,909	5,958	217
8	135,738	28,823	1,036	93	88,065	5,167	6,445	5,949	161
9	138,732	28,451	1,209	125	91,069	5,191	6,904	5,591	192
10	145,544	29,580	1,181	111	96,040	5,567	6,863	5,974	228
11	143,797	29,178	1,217	98	94,956	5,419	6,924	5,748	257
12	141,698	29,412	1,196	101	93,350	5,368	6,652	5,184	436
2008 — 1	133,497	26,858	992	103	89,170	5,072	6,129	4,844	330
2	140,032	28,237	1,193	97	92,787	5,473	7,220	4,799	225
3	142,113	28,482	1,160	99	94,979	5,522	6,804	4,861	207
2008.1～3	415,642	83,577	3,345	299	276,936	16,067	20,153	14,504	762
2007.1～3	427,052	97,557	3,572	292	269,222	15,762	23,608	15,987	1,052

資　料：経済産業省調査。
備　考：交織を含む。
Source　：The Ministry of Economy Trade and Industry.
Remarks　：Mixed fabrics included.

絹人絹織物製造業者の絹織物生産数量

Production of Silk Fabrics by Silk and Rayon Weavers.

(単位：1,000㎡)
(Unit : 1,000sq.meters)

品種 Type of Fabrics / 年月 Year & Month	総数 Grand Total	絹・絹紡織物 Silk and Spun Silk Fabrics							
		広巾織物 Double Width				小巾織物 Single Width			その他の後練(後染) Other Piece Dyed Silk Fabrics
		計 Total	羽二重類 Habutae	クレープ類 Crepe	先練(先染) Dyed Yarn	計 Total	ちりめん類 Silk crape	先練(先染) Dyed Yarn	
暦年 Calendar Year									
2002	26,715	10,277	4,355	3,251	2,673	11,855	8,030	3,824	4,582
2003	23,822	8,371	3,800	2,464	2,107	11,399	7,653	3,747	4,053
2004	21,859	7,540	3,510	2,190	1,842	10,809	7,346	3,463	3,509
2005	19,698	6,664	2,965	1,903	1,800	10,181	6,900	3,280	2,852
2006	18,153	6,104	2,734	1,728	1,646	9,194	5,882	3,312	2,855
2007	15,182	5,214	2,276	1,547	1,392	7,575	4,578	2,997	2,392
2007 — 2	1,312	427	193	123	111	679	422	256	206
3	1,329	449	200	133	115	658	394	264	222
4	1,317	443	198	125	120	664	409	256	210
5	1,225	440	192	124	124	585	337	248	200
6	1,354	461	194	139	129	683	428	255	210
7	1,276	445	186	138	121	647	391	256	184
8	1,108	392	169	124	99	554	315	239	162
9	1,286	427	187	134	106	661	423	238	197
10	1,262	423	189	122	111	629	377	252	210
11	1,297	451	191	132	127	645	399	245	201
12	1,274	435	187	136	112	639	400	238	200
2008 — 1	1,070	394	180	114	100	501	270	231	175
2	1,269	422	183	129	110	644	407	237	203
3	1,241	419	184	125	110	634	402	232	188
2008.1～3	3,580	1,235	547	368	320	1,779	1,079	700	566
2007.1～3	3,799	1,296	581	372	343	1,884	1,101	782	619

資　料：経済産業省調査。
備　考：単位以下四捨五入。

Source　: The Ministry of Economy Trade and Industry.
Remarks : Fractions of 0.5 and over counted as a whole number and the rest disregarded.

丹後・長浜・西陣の織物生産高

Production of Silk Fabrics in Tango , Nagahama and Nishijin

項目 Item / 年月 Year & Month	絹人絹織物製造業者の絹織物生産数量 Silk Fabrics Production		丹後 Tango (白生地) (White Fabrics)		長浜 Nagahama (白生地) (White Fabrics)		西陣 Nishijin (帯) (Sash)	
	数量 Quantity (千㎡) (1,000㎡)	前年(月)比 Ratio to previous year	生産数量 Production (反) (Roll)	前年(月)比 Ratio to previous year	生産数量 Production (反) (Roll)	前年(月)比 Ratio to previous year	推定出荷数量 Estimated Shipments (本)	前年(月)比 Ratio to previous year
暦年 Calendar Year								
2002	26,715	89.6	1,179,219	95.1	229,272	83.7	998,239	79.1
2003	23,822	89.2	1,171,145	99.3	208,660	91.0	922,533	92.4
2004	21,859	91.8	1,119,897	95.6	189,426	90.8	780,082	84.6
2005	19,698	90.1	1,058,571	94.5	170,061	89.8	691,780	88.7
2006	18,153	92.2	912,027	86.2	132,448	77.9	598,040	86.4
2007	15,182	83.6	712,560	78.1	97,204	73.4	977,719	163.5
2007 — 2	1,312	80.0	65,785	72.5	8,987	64.5	108,331	173.5
3	1,329	78.0	58,873	64.9	9,660	68.0	80,785	150.1
4	1,317	79.2	62,535	70.1	8,840	63.1	84,654	142.4
5	1,225	79.6	50,444	66.2	7,760	56.3	71,255	139.4
6	1,354	82.4	69,024	77.2	7,169	70.0	84,513	180.8
7	1,276	83.3	61,873	80.3	7,237	69.3	88,894	169.1
8	1,108	82.2	47,776	81.9	6,078	68.9	89,497	211.9
9	1,286	87.4	69,062	92.9	8,439	111.1	70,350	203.0
10	1,262	87.5	58,668	84.8	9,400	100.7	60,982	161.7
11	1,297	94.5	63,195	97.0	8,207	93.1	78,005	154.9
12	1,274	93.0	62,144	89.7	8,097	89.9	67,462	144.6
2008 — 1	1,094	94.5	38,929	90.2	7,685	104.8	56,667	60.9
2	1,290	96.7	65,845	100.1	7,504	83.5	93,343	86.2
3			65,402	111.1	8,194	84.8	78,494	97.2
2008.1～2	2,384	96.5	104,774	96.2	15,189	93.1	150,010	74.5
2007.1～2	2,470	80.5	108,966	71.2	16,317	62.3	201,322	164.0

資　料：「絹人絹織物製造業者の絹織物生産数量」は経済産業省調査。主要3産地の生産量、出荷数量は社団法人日本生糸問屋協会調査。

備　考：2006年1月以降の西陣の帯生産数量には、帯裏地等を含む。

Source　: The Ministry of Economy Trade and Industry and Japan Raw Silk Dealer's Association.

世界主要国の家蚕繭生産高

Domesticated Silkworm Cocoon Production in Major Countries

		2001年	2002年	2003年	2004年
		トン(MT)	トン(MT)	トン(MT)	トン(MT)
日本	Japan	1,031	880	780	683
中国	China	602,000	645,000	611,000	677,000
インド	India	140,000	128,000	117,000	120,000
ﾍﾞﾄﾅﾑ	Vietnam	22,000	21,000	(21,000)	(21,000)
ﾌﾞﾗｼﾞﾙ	Brazil	9,916	10,238	9,966	8,005
タイ	Thailand	17,900	17,800	17,800	16,800
ｳｽﾞﾍﾞｷｽﾀﾝ	Uzbekistan	20,000	(20,000)	(20,000)	(20,000)
イラン	Iran	5,000	3,500	3,200	
ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ	Indonesia	749	691		
トルコ	Turkey	47	100	169	
ﾌﾞﾙｶﾞﾘｱ	Bulgaria	52	50	0.3	
ｷﾞﾘｼｬ	Greece	40	60	60	70
ﾌｨﾘﾋﾟﾝ	Philippines	17	28	23	22
主要国の計 Total		818,752	847,347	800,998	863,580

注1. 日本は農林水産省特産振興課、中国は中国国家統計局、インドはインド繊維省中央蚕糸局（CSB)の統計値をそれぞれ使用、それ以外の国は国際養蚕委員会（ISC）の統計値を使用、または一部その数値を基に独立行政法人農畜産業振興機構が推定した。
2. 不明な数値は空欄とした。ただし、シェアの大きいベトナム、ウズベキスタンは不明年の前年と同数量とし括弧書きとした。

Note: 1. Figures of Japan are based on the data of the Agricultural Production Bureau, MAFF.
Figures of China are based on the data of National Bureau of Statistics of China.
Figures of India are based on the data of the Central Silk Board (CSB), Ministry of Textiles in India.
Other than these countries, based on the data of International Sericulture Commission (ISC), or the estimate of ALIC.
2. As the figures of Vietnam (since 2003) and Uzbekistan (since 2002) are not reported, they are taken as the same amount as previous year because they constitute high proportion of total.

世界主要国の家蚕生糸の生産高

Domesticated Raw Silk Production in Major Countries

		2001年		2002年		2003年		2004年	
		トン(MT)	俵(Bale)	トン(MT)	俵(Bale)	トン(MT)	俵(Bale)	トン(MT)	俵(Bale)
日本	Japan	431	7,200	391	6,500	287	4,800	263	4,400
中国	China	55,986	933,100	62,888	1,048,100	59,573	992,900	66,008	1,100,100
インド	India	15,842	264,000	14,617	243,600	13,970	232,800	14,620	243,700
ﾍﾞﾄﾅﾑ	Vietnam	2,000	33,300	2,250	37,500	(2,250)	(37,500)	(2,250)	(37,500)
ﾌﾞﾗｼﾞﾙ	Brazil	1,484	24,700	1,607	26,800	1,563	26,100	1,512	25,200
タイ	Thailand	1,500	25,000	1,500	25,000	1,500	25,000	1,420	23,700
ｳｽﾞﾍﾞｷｽﾀﾝ	Uzbekistan	1,100	18,300	(1,100)	(18,300)	(1,100)	(18,300)	(1,100)	(18,300)
イラン	Iran	770	12,800	630	10,500	500	8,300		
ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ	Indonesia	110	1,800	91	1,500				
トルコ	Turkey	7	100	17	300	28	500		
ﾌﾞﾙｶﾞﾘｱ	Bulgaria	7	100	7	100	0	0		
ｷﾞﾘｼｬ	Greece	4	100	4	100	4	100	4.5	100
ﾌｨﾘﾋﾟﾝ	Philippines	1	0	3	100	3	100	3	100
主要国の計 Total		79,242	1,320,500	85,105	1,418,400	80,778	1,346,400	87,181	1,453,100

注1. 日本は農林水産省特産振興課発表の統計値を使用。中国は中国国家統計局の統計値の繭生産数量から独立行政法人農畜産業振興機構が推定した。インドはインド繊維省中央蚕糸局（CSB)の統計値を使用した。それ以外の国は国際養蚕委員会（ISC）の統計値を使用した。
2. 不明な数値は空欄とした。ただし、シェアの大きいベトナム、ウズベキスタンは不明年の前年と同数量とし括弧書きとした。

Note: 1. Figures of Japan are based on the data of the Agricultural Production Bureau, MAFF.
Figures of China are based on the data of National Bureau of Statistics of China.
Figures of India are based on the data of the Central Silk Board (CSB), Ministry of Textiles in India.
Other than these countries, based on the data of International Sericulture Commission (ISC).
2. As the figures of Vietnam (since 2003) and Uzbekistan (since 2002) are not reported, they are taken as the same amount as previous year because they constitute high proportion of total.

中国省別桑園面積・家蚕繭生産量・生糸生産量・製糸工場数
Mulberry Farm Area, Domesticated Cocoon Production, Raw Silk Production, and Number of Filatures in China

区分 / 省 Province		桑園面積 Mulberry Farm Area (10,000ha、%)			家蚕繭生産量 Domesticated Cocoon Production (トン、%)(MT, %)			生糸生産量 Raw silk Production (トン、%)(MT, %)		
		2005	2006	対前年比 2006/05	2005	2006	対前年比 2006/05	2005	2006	対前年比 2006/05
山西	Shanxi	0.82	1.10	135	3,913	5,602	143	196	175	89
上海	Shanghai	0.03	–	–	408	–	–	–	–	–
江蘇	Jiangsu	9.08	8.98	99	100,539	117,800	117	18,580	20,186	109
浙江	Zhejiang	7.04	7.40	105	74,838	85,122	114	20,530	19,051	93
安徽	Anhui	4.67	5.47	117	33,900	37,596	111	3,890	4,038	104
江西	Jiangxi	1.63	1.90	116	10,577	12,110	114	1,650	1,676	102
山東	Shandong	5.00	5.00	100	36,845	39,700	108	6,800	6,253	92
河南	Henan	2.20	2.73	124	8,600	13,390	156	300	318	106
湖北	Hubei	2.53	2.79	110	13,583	15,706	116	650	536	83
湖南	Hunan	0.61	0.69	112	3,663	4,100	112	45	50	111
広東	Guangdong	2.53	5.33	211	34,300	68,750	200	1,100	1,138	103
広西	Guangxi	9.40	12.00	128	148,460	185,000	125	6,600	8,020	122
重慶	Chongqing	7.93	7.93	100	31,000	23,828	77	6,500	6,490	100
四川	Sichuan	10.67	10.67	100	77,500	77,800	100	17,510	21,914	125
貴州	Guizhou	0.58	0.63	108	1,199	1,254	105	–	–	–
雲南	Yunnan	5.27	6.25	119	20,095	31,477	157	1,550	1,335	86
陝西	Shaanxi	4.80	5.00	104	20,272	18,498	91	1,775	1,657	93
甘粛	Gansu	0.62	0.65	104	537	613	114	–	–	–
寧夏	Ningxia	0.28	0.33	120	413	475	115	30	59	197
新疆	Xinjiang	0.50	0.73	145	819	895	109	55	–	–
内蒙古	Inner Mong	–	–	–	–	–	–	–	208	–
合計	Total	76.20	85.57	112	621,461	739,715	119	87,761	93,105	106

製糸工場数（件） Number of Filatures		
2005	2006	前年比 2006/05
702	710	101

資料：中国絲綢協会資料による
注　：合計はラウンドの関係で一致していない。
Source: China Silk Association
Note: Total may not add up due to round off.

中国省別家蚕繭生産量の推移 Domesticated Cocoon Production in China (1995年～2006年)

(単位：万トン)(Unit: 10,000ton)

地域	Area	1995年	1996年	1997年	1998年	1999年	2000年	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年	前年比 06/05(%)
北　京	Beijing													
天　津	TianJin													
河　北	Hebei	0.1	0.1		0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1				
山　西	Shanxi	0.7	0.5	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.3	0.4	0.6	150.0
内蒙古	Inner Monglia													
遼　寧	Liaoning													
吉　林	Jilin													
黒龍江	Heilongjiang													
上　海	Shanghai	0.3									0.0	0.0		
江　蘇	Jiangsu	18.6	9.2	8.6	8.5	8.2	9.0	10.1	11.9	10.7	11.1	10.1	11.8	116.8
浙　江	Zhejiang	12.2	8.4	9.5	10.4	9.4	9.5	11.0	9.9	7.9	7.6	7.5	8.5	113.3
安　徽	Anhui	4.0	2.4	2.4	2.5	2.1	2.5	2.7	2.8	2.6	2.7	3.4	3.8	111.8
福　建	Fujian													
江　西	Jiangxi	1.6	0.8	0.5	0.4	0.3	0.3	0.5	0.7	0.8	1.0	1.1	1.2	109.1
山　東	Shandong	5.0	4.1	3.4	4.2	4.2	5.3	6.9	6.9	6.7	3.5	3.7	4.0	108.1
河　南	Henan	1.8	1.3	1.3	0.6	1.2	1.3	1.5	1.7	1.1	0.7	0.9	1.3	144.4
湖　北	Hubei	2.2	1.2	1.2	1.4	1.4	1.2	1.2	1.3	1.2	1.1	1.4	1.6	114.3
湖　南	Hunan	0.3	0.2	0.1	0.1			0.1	0.1	0.2	0.4	0.4	0.4	100.0
広　東	Guangdong	3.3	2.2	2.1	2.1	2.3	3.1	4.5	5.3	5.2	2.7	3.4	6.9	202.9
広　西	Guangxi	2.1	1.7	1.5	1.8	1.9	3.0	5.6	7.4	8.7	9.2	14.8	18.5	125.0
海　南	Hainan													
重　慶	Chongqing				2.9	2.4	3.0	3.2	3.4	2.8	2.6	3.1	2.4	77.4
四　川	Sichuan	20.3	12.2	8.5	9.3	8.1	8.7	9.2	9.3	9.3	8.3	7.8	7.8	100.0
貴　州	Guizhou	0.2	0.1	0.1	0.2	0.2	0.1	0.2	0.2	0.1	0.2	0.1	0.1	100.0
雲　南	Yunnan	0.8	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.9	1.1	1.3	1.9	2.0	3.1	155.0
チベット	Tibet													
陝　西	Shaanxi	1.8	1.5	1.4	1.6	1.5	1.5	1.6	1.7	1.9	1.6	2.0	1.8	90.0
甘　粛	Gansu										0.1	0.1	0.1	100.0
青　海	Qinghai													
寧　夏	Ningxia										0.0	0.0	0.0	
新　彊	Xinjiang	0.6	0.3	0.3	0.4	0.3	0.3	0.3	0.2	0.1	0.1	0.1	0.1	100.0
合　計	Total	76.0	47.1	42.3	47.5	44.7	50.1	60.2	64.5	61.1	55.0	62.2	73.9	118.8

資料：2003年までは中国国家統計局「中国統計年鑑」、2004年以降は中国絲綢協会資料による。
　　合計はラウンドの関係で一致していない。

Source: Until 2003, "China Statistical Yearbook" National Bureau of Statistics of China
　　Since 2004, China Silk Association

Note: Total may not add up due to round off.

中国のシルク類の輸出状況
Silk Exports of China
（2007年1月～12月）

相手国		Country	生糸（柞蚕糸、野蚕生糸を含む） Raw Silk (tussah silk and wild raw silk included)			
			数量 Quantity (Kg)		金額 Amount （百万USドル） (USD1,000,000)	
			2007年実績	07/06(%)	2007年実績	07/06(%)
1	インド	India	8,761,294	257.50	207.499	219.07
2	イタリア	Italy	984,361	85.90	26.280	76.46
3	韓国	South Korea	904,656	143.26	24.108	122.35
4	日本	Japan	776,997	123.68	21.534	96.31
5	ルーマニア	Romania	489,511	ー	12.194	ー
6	ベトナム	Vietnam	482,640	155.90	11.992	115.11
7	パキスタン	Pakistan	262,751	141.70	6.231	122.95
8	バングラデッシュ	Bangladesh	232,782	342.63	5.454	297.22
9	アラブ首長国連邦	United Arab Emirates	227,815	546.76	5.523	459.87
10	タイ	Thailand	77,551	396.86	2.064	373.24
11	その他	Others	552,798	197.73	14.239	174.45
合計		Total	13,753,156	204.91	337.118	169.93

相手国		Country	絹糸 Spun Silk Yarn			
			数量 Quantity (Kg)		金額 Amount （百万USドル） (USD1,000,000)	
			2007年実績	07/06(%)	2007年実績	07/06(%)
1	イタリア	Italy	689,599	80.35	20.953	75.19
2	ドイツ	Germany	502,424	109.64	17.232	105.11
3	インド	India	477,188	109.61	12.711	89.75
4	日本	Japan	446,723	58.08	13.973	48.77
5	パキスタン	Pakistan	370,953	114.06	10.268	101.93
6	タイ	Thailand	121,009	91.61	3.557	83.28
7	韓国	South Korea	116,707	200.41	3.745	194.04
8	トルコ	Turkey	42,935	133.41	1.729	143.72
9	インドネシア	Indonesia	35,227	136.63	0.904	110.78
10	ブラジル	Brasil	28,062	ー	0.863	ー
11	その他	Others	147,452	151.91	5.025	147.71
合計		Total	2,978,279	93.32	90.960	83.62

相手国		Country	絹織物 Silk Fabrics（＞85%Silk）			
			数量 Quantity （メートル）(meter)		金額 Amount （百万USドル） (USD1,000,000)	
			2007年実績	07/06(%)	2007年実績	07/06(%)
1	インド	India	73,950,336	136.02	172.531	124.92
2	イタリア	Italy	30,886,756	110.71	105.778	105.53
3	香港	Hong Kong	26,520,128	115.26	114.749	118.97
4	パキスタン	Pakistan	20,306,364	75.91	41.563	77.57
5	韓国	South Korea	19,590,513	85.01	73.636	86.47
6	日本	Japan	12,961,633	88.53	33.084	83.48
7	アメリカ	United States	8,833,028	89.97	51.711	93.50
8	シンガポール	Singapore	7,608,011	53.18	15.869	38.34
9	アラブ首長国連邦	United Arab Emirates	5,370,503	104.27	16.772	99.96
10	フランス	France	4,562,695	103.47	17.175	109.10
11	その他	Others	24,301,715	88.31	86.515	90.14
合計		Total	234,891,682	101.72	729.383	98.79

資料：中国税関
Source: Customs General Administration in China

中国のシルク類の輸出状況
Silk Exports of China
（2008年1月～3月）

相手国		Country	生糸（柞蚕糸、野蚕生糸を含む） Raw Silk (tussah silk and wild raw silk included)			
			数量 Quantity (Kg)		金額 Amount （百万USドル） (USD1,000,000)	
			2008年実績	08/07(%)	2008年実績	08/07(%)
1	インド	India	2,119,120	140.82	46.775	121.91
2	ルーマニア	Romania	300,588	1,158.74	7.335	1,094,776.12
3	イタリア	Italy	258,761	81.85	6.875	78.27
4	日本	Japan	223,416	233.24	6.107	220.47
5	ベトナム	Vietnam	197,287	306.34	4.928	303.82
6	韓国	South Korea	181,673	80.76	4.430	70.26
7	バングラデッシュ	Bangladesh	60,073	176.82	1.317	156.23
8	パキスタン	Pakistan	42,932	142.07	0.969	118.83
9	アラブ首長国連邦	United Arab Emirates	40,466	55.94	0.875	38.02
10	エジプト	Egypt	22,656	239.14	0.497	194.05
11	その他	Others	127,033	89.34	3.149	79.66
合計		Total	3,574,005	140.93	83.257	124.85

相手国		Country	絹糸 Spun Silk Yarn			
			数量 Quantity (Kg)		金額 Amount （百万USドル） (USD1,000,000)	
			2008年実績	08/07(%)	2008年実績	08/07(%)
1	イタリア	Italy	283,936	174.09	8.659	163.43
2	日本	Japan	142,773	185.05	4.263	161.91
3	インド	India	117,345	275.76	2.970	222.13
4	ドイツ	Germany	94,906	91.60	3.243	86.77
5	パキスタン	Pakistan	77,550	69.37	2.042	62.15
6	タイ	Thailand	57,449	231.92	1.600	206.99
7	トルコ	Turkey	17,894	188.04	0.669	198.35
8	韓国	South Korea	8,085	141.69	0.195	114.98
9	香港	Hong Kong	6,181	243.25	0.180	257.14
10	ベルギー	Belgium	4,600	—	0.227	—
11	その他	Others	25,564	47.03	0.822	42.05
合計		Total	836,283	140.53	24.870	126.91

相手国		Country	絹織物 Silk Fabrics（＞85%Silk）			
			数量 Quantity （メートル）(meter)		金額 Amount （百万USドル） (USD1,000,000)	
			2008年実績	08/07(%)	2008年実績	08/07(%)
1	イタリア	Italy	10,280,092	170.59	32.682	142.21
2	インド	India	9,760,183	79.55	20.582	70.11
3	香港	Hong Kong	5,321,694	112.19	22.845	104.55
4	韓国	South Korea	4,584,623	100.44	17.615	103.01
5	日本	Japan	3,485,627	154.43	8.691	145.27
6	パキスタン	Pakistan	3,455,368	121.75	7.330	128.49
7	アメリカ	United States	1,655,195	92.06	9.911	89.88
8	マレーシア	Malaysia	1,538,923	217.14	4.990	203.41
9	アラブ首長国連邦	United Arab Emirates	1,537,558	189.57	5.354	204.12
10	フランス	France	1,403,137	125.53	5.344	130.53
11	その他	Others	6,742,600	119.22	22.215	123.09
合計		Total	49,765,000	116.30	157.549	111.56

資料：中国税関
Source: Customs General Administration in China

ブラジルの繭・生糸生産量推移
Cocoon and Raw Silk Production in Brazil

シルク年度 Silk Year （9〜8月） (Sep-Aug)	繭生産量 Cocoon Production （トン）(Ton)
1985/86	11,353
1986/87	10,575
1987/88	11,830
1988/89	11,470
1989/90	15,829
1990/91	17,221
1991/92	17,586
1992/93	19,134
1993/94	18,260
1994/95	16,260
1995/96	15,368 (95%)
1996/97	14,811 (96%)
1997/98	14,594 (99%)
1998/99	10,305 (71%)
1999/2000	8,473 (82%)
2000/01	9,916 (117%)
2001/02	10,238 (103%)
2002/03	9,966 (97%)
2003/04	8,005 (80%)
2004/05	7,146 (89%)
2005/06	8,051 (113%)
2006/07	8,617 (107%)
2007/08 （見込み） (Estimate)	7,007 (81%)

暦年 Calendar Year	生糸生産量 Raw Silk Production （kg）	生糸生産量 Raw Silk Production （俵換算） (Bale value)
1985	1,553,776	25,896
1986	1,663,976	27,733
1987	1,658,375	27,640
1988	1,748,996	29,150
1989	1,696,622	28,277
1990	1,693,206	28,220
1991	2,077,155	34,619
1992	2,296,053	38,268
1993	2,325,809	38,763
1994	2,535,440	42,257
1995	2,467,524 (97%)	41,125
1996	2,242,000 (91%)	37,367
1997	2,120,129 (95%)	35,335
1998	1,820,745 (86%)	30,346
1999	1,553,722 (85%)	25,895
2000	1,389,356 (89%)	23,156
2001	1,484,905 (107%)	24,748
2002	1,607,485 (108%)	26,791
2003	1,562,563 (97%)	26,043
2004	1,512,133 (97%)	25,202
2005	1,284,510 (85%)	21,409
2006	1,387,289 (108%)	23,121
2007	1,219,562	20,326
2008 （見込み） (Estimate)	1,223,305 (100%)	20,388

資料：ブラジル製糸協会
注：( )内は対前年比
〔 〕内の見込みは2008年1月現在
Source: ABRASSEDA
Note: Figures in parenthesis are compared to the previous year.
Estimates are as of January 2007.

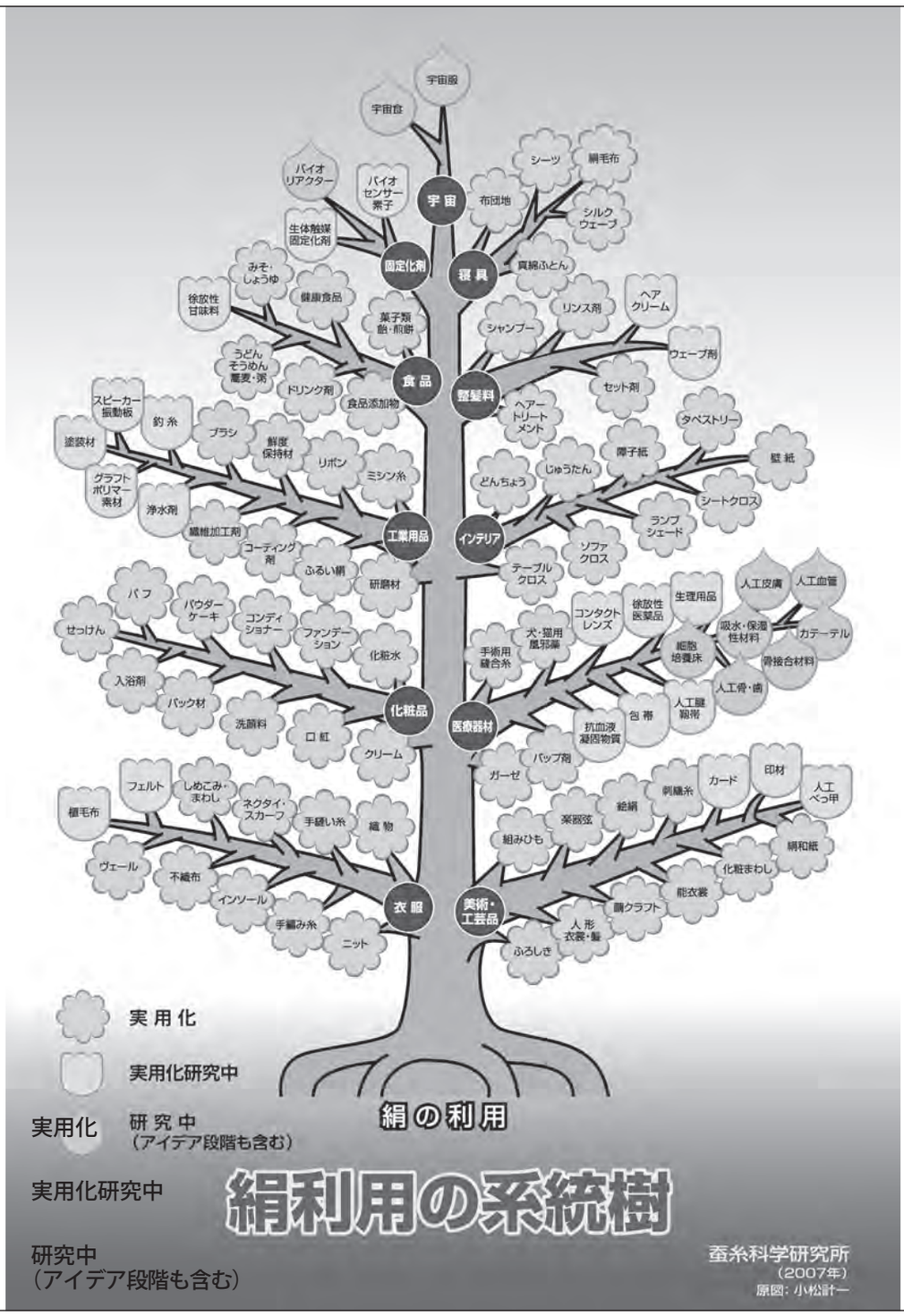
ブラジル生糸、絹撚糸及び副蚕糸の内需・輸出別販売状況
Domestic Demand and Exports of Raw Silk, Twisted Silk Yarn, and Secondary Silk Yarn in Brazil

単位：ﾄﾝ, ()内は60kg俵
Unit: ton, Figures in Parenthesis: Bales of 60kg

区分		2003年実績	2004年実績	2005年実績	2006年実績	2007年実績	07/06(%)
生糸 Raw Silk	内需 Domestic Demand	90 (1,503)	106 (1,770)	118 (1,971)	72 (1,202)	84 (1,403)	116.7
	輸出 Export	1,057 (17,652)	837 (13,978)	676 (11,289)	782 (13,059)	876 (14,629)	112.0
	計 Total	1,147 (19,155)	943 (15,748)	794 (13,260)	854 (14,262)	960 (16,032)	112.4
絹撚糸 Twisted Silk Yarn	内需 Domestic Demand	77 (1,286)	71 (1,186)	92 (1,536)	74 (1,236)	78 (1,303)	105.4
	輸出 Export	431 (7,198)	516 (8,617)	454 (7,582)	392 (6,546)	274 (4,576)	69.9
	計 Total	508 (8,484)	587 (9,803)	546 (9,118)	466 (7,782)	352 (5,878)	75.5
糸類計 Total	内需 Domestic Demand	167 (2,789)	177 (2,956)	210 (3,507)	146 (2,438)	162 (2,705)	111.0
	輸出 Export	1,488 (24,850)	1,353 (22,595)	1,130 (18,871)	1,174 (19,606)	1,150 (19,205)	98.0
	計① Total①	1,655 (27,639)	1,530 (25,551)	1,340 (22,378)	1,320 (22,044)	1,312 (21,910)	99.4
副蚕糸 Secondary Silk Yarn	内需 Domestic Demand	264	123	43	84	72	85.7
	輸出 Export	217	386	295	241	256	106.2
	計② Total②	481	509	338	325	328	100.9
	②／①	29.1	33.3	25.2	24.6	25.0	

資料：ブラジル製糸協会
注：俵換算は、合計で一致しない場合がある。
Source: ABRASSEDA
Note: Bale value may not add up.

絹にはこんなにいろいろな使い道があります。



シルク利用の系統樹（原図　蚕糸科学研究所 2002 年 1 月）

※「シルクレポート」の主要記事と統計データは、当支援センターのホームページでもご覧になれます。

http://www.silk-teikei.jp/index.html

シルクレポート　2008 年 7 月号 NO. 1　　平成 20 年 6 月 25 日発行

編集 / 発行　**（財）大日本蚕糸会 蚕糸・絹業提携支援センター**
（問い合わせ先）　〒 100-0006 東京都千代田区有楽町 1-9-4 蚕糸会館 5 階
TEL：03-3214-3500
FAX：03-3214-3511
URL:http://www.silk-teikei.jp/index.html

製本／印刷　株式会社 正大印刷社

無断転載禁ず